
Dream is Professional

厨王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dream is Professional

【Nコード】

N1598G

【作者名】

厨王

【あらすじ】

プロのサッカー選手になった亀山俊彦^{かめやまとしひこ}。入団したチームはJ2落ちした元名門。そんな元名門を癖のある仲間と共にを立て直していく主人公の恋や友情を描いていきます。ぜひお読み下さい。

第1話プロ入り？（前書き）

未だに「ネギま」の連載が終わっていないのですが新連載始めます。
よろしく願います。

なお、小説内に出て来るチーム名は架空のチームです。

第1話プロ入り？

人生はたいてい自分の思った通りには行かない。

世の中にはいい意味でも悪い意味でも、全く想像してないことがいくつも起こる。

もちろん、俺の人生も例外で無く――

「ウチのチームに来てくれませんか？」

よもや、そんな言葉を聞くなんて、想像もしてなかった。

まさか俺が――

Jリーガーになるなんて

時間は少し戻り――

俺、かめやまとしひこ亀山俊彦は高校選手権に出場していた。

だけど――

『試合終了ー！ 選手権初出場の駒坂高校、こまさか2回戦で敗退です！』

『惜しい試合でしたけどね、とうしん東新に諏訪すわがいて駒坂にがいなかった、
というだけの差でしたね』

『それだけ諏訪君の存在は大きかったということですか』

『そうですね。せめて駒坂に野々村のむらくらいのゴールキーパーがいれば、結果は変わっていたかもしれませんよ』

『それでは、その野々村キャプテンに話を聞いて見ましょう――』

選手権初出場だった駒坂高校は1回戦を1 - 0で勝利したが優勝候補の東新学園と戦い、0 - 1で敗れた。

駒坂のシュートは京都に内定していた野々村に防がれまくり、鹿島に内定していた諏訪にフリーキックのこぼれ球を決められ負けた。

そしてこの日、俺の高校サッカーは幕を閉じた。

「お疲れ様、俊彦とし！」

ロッカールームで一番に笑顔で声をかけてくれたのは幼なじみでマネージャーの海空うみそら姫花流だった。

小柄でいつから切つてないか分からないくらい長い黒髪をたなびかせてる。

底抜けに明るい元気な奴だ。

「　　ありがとう」

「なにしょぼくれてるの！　アンタらしくないわよキャプテン！」
いつもこいつが俺を茶化するときキャプテンと呼ぶ。

いつもなら何か言い返すところだけど、今日はそんな元気もなかった。

「みんな、揃ってますね」

＜そう言って皆の前に立ったのは駒坂高校の監督である小山幹久。
すぐく温厚な性格で、淒くフレンドリーな人だ。

＜

「みなさん、お疲れ様でした。とても　　いい試合でした。」

啜り泣く声がする。

「負けてしまいましたが、あなたたちは何も恥じることはありません。
あなたたちの人生で今日という日はかけがえのない思い出になります。
この思い出を大切にしてください」

「ハイっ！」

チーム全員で返事をすると小山監督はニコツと微笑んだ。

何気なく姫花流を見ると、ついさっきまで元気だった奴が涙ぐんでいた。

さっきまで無理矢理笑っていたのかと思うと、心が痛んだ。

「亀山、これからどうするの?」

ロッカールームを出てからすぐに話し掛けて来たのは幼なじみの山はらたかふみ
原孝文。

既にサッカーの強豪TAKADA・S・Cのある高田印刷に内定をもらっている。

茶髪の短髪で、(試合の間は外しているが)耳にイヤリングをしている、チャライ感じの男だ。

勿論、見た目と違って中身はしっかりした奴だ。

「帰るけど」

「そうじゃなくて、進路のこと」

「まだわかんないけど 就職決まってるから就活しながらフリーターかな? あんまり迷惑かけられないし」

「何バカなこと言ってるの! 今日から猛勉強だよ!」

姫花流が会話に加わって来た。

「えゝ」

「えゝじゃないの! 教えてあげるからさ」

姫花流は成績優秀で日本最高峰クラスの一流大学も狙えるのに、本
人いわくプレッシャーに弱いっつうことで地元の二流大学に行く予
定だ。

「亀山君」

監督が俺を呼んだ。

「なんですか？」

「君と話したいって人がいるから、行って来てあげて下さい」

「話したい人？」

「ええ きつとびっくりしますよ」

「なんでお前ら着いて来てんの？」

監督に言われた場所に行こうとすると、姫花流と山原もついてきた。

「だって 気になるもん」

姫花流がちょっと心配そうな顔をした。

「女だったら姫がこま」

「言っな！」

山原が全部喋り終わる前に海空にげんこつされた。

「痛っ！ ホントのことなのに」

「うつさい！」

山原がまた叩かれた。

ちなみに『姫』は姫花流のあだ名。

俺以外の3年はみんな姫花流のことを姫と呼ぶ。

「あ、あそこだ」

じゃれあってる二人を無視して監督に教えてもらった場所に着いた。

「ここで待ってるの？」

「監督はそう言ってたけど」

しばらく待っていると、ベンチコートを着た髭面ひげつらの男が近付いて来た。

「君が亀山俊彦君？」

「そうですが」

「私、こういう者です」

そう言いながら男が名刺をくれた。

「東京ミストラル強化部部长、ほっしょうみちお北條道雄」

「はい」

東京ミストラルはJリーグの昔は名門と言われていたが、現在はJ2に降格したチームだ。

「プロのスカウトの人が、俺に何の用ですか？」

「単刀直入に言います——亀山君、ウチのチームに来てくれませんか？」

「え？」

自分の耳を疑った。

とても信じられなかった。

「ご存知でしょうが、東京ミストラルは去年J1から降格し、選手が大量に移籍しました。そこで、あなたが必要なのです」

「俺が」

「気持ちが決まったら、ここに電話してください」

北條さんはそう言いながら名刺を軽く叩き、去って行った。

「これって　スカウトだよな？」

山原が俺に聞いてくる。

「多分」

「俊彦^{とし}、凄いじゃない！」

「うん」

ホントはとても凄いことで、名誉なことだと思う。

だけど自分でも驚くぐらい実感がない。

「うん じゃないよ！ 凄いよ！」リーガーだよ！」

姫花流は凄く興奮している。いつも以上に声がでかくなる。

「プロに なるのか？」

山原がまた俺に聞いてくる。

「さあ 分からない」

俺は正直な気持ちを伝えた。

「何で？ 選ばれた人しかねないんだよ？ チャンスだよ！」

「まあ、そうだけど」

俺だって本当はプロでやりたい。

でも、恐い。

俺がプロで通用するか、分からない。

いや、多分通用しないだろう、という不安の方が強い。

そんな時、山原がまるで心を読んだみたいに、強い口調で言ってきた。

「ビビってんじやねえよ、らしくねえ。どうせ何選んだってな、たいていは最後に後悔することになる。だけど、チャレンジしておけば、後悔しない可能性が僅かだけどある。今しか出来ないことやっておけよ、大学や就職なんてそれからでも遅くない」

「うん」

「お前が立とうとしてる舞台は姫が言った通り選ばれた人間しか立てない舞台。お前は何千何万の中から選ばれた人間なんだよ。胸を張れ」

山原がニツと笑う。

「ありがとう」

「もし駄目なら私達がついてるよ」

今度は姫花流が言う。

「俊彦^{とし}を一番応援してたのは——私なんだから」

姫花流が顔を赤らめながら言う。

「ちっちゃい頃言ってたでしょ？ プロになりたいって」

そんなこと、とっくに忘れてた。

でも、確かにそうだった。

まだ夢を持っただけだった頃の話。

こいつは覚えてくれてた。

「俺、やるよ。プロになる」

「そうこなくっちゃ！」

姫花流が俺の肩を強く叩く。

「じゃ、俺がプロ行くまで待っててよ」

山原がそんなこと言い出した。

「約束覚えてないのか？ 二人で」のピッチで試合しようって

「ああ」

そんなこと言ってた気がする。

「忘れてたな」

「うん」

「ったく」

山原がまたニツと笑う。

「俊彦^{とし}、いまなら走れば間に合うよ!」

「ああ、伝えて来る!」

そう言った時には走り出してた。

第2話入団会見

北條さんに東京ミストラルに入団すると話し、二週間が経った。

今日は東京ミストラルの入団会見の日。俺が俺以外の入団選手や監督に初めて会う日でもある。

会見はクラブハウスで行われるため、俺もスーツを着て初めてクラブハウスに来た。

「おじゃましまーす」

中には誰もいなかった。

「他人の家じゃないんだから」

後ろから声をかけてきたのはスーツを着た190センチぐらいありそうな金髪で短髪、青目の外人っぽい男。

「どなたですか？」

「今日から東京ミストラルに入団するマイケル・仁・ジェームスだ。マイケルでいいぜ、亀山」

「なんで俺の名前を？」

「会ったことあるんだけどな。選手権の抽選会と開会式で」

そつえば京都の尊能学園そのうに一人でかい外人っぽい奴がいた気がする

る。

でもその時は長髪だったはずだ。

マイケルにそのことを聞くと、「プロ入った記念にやってみた」と言われた。

「それよりさつさと中入ろうぜ　玄関は寒い」

俺はそのままマイケルに連れて行かれた。

マイケルに連れて行かれた部屋でクラブスタッフに会う。

「ジエームス・仁・マイケルと亀山俊彦だな？　選手の控室は隣、後このユニフォームをスーツの下に着ておいて」

神谷さんに渡されたのは俺の名前が入った背番号28の東京ミストラルのユニフォームだ。

上は緑一色、下は黒一色であちこちにスポンサー名が入っている。

胸のエンブレムの上についている五つの星がこのチームの過去の凄さを表している。

少し感動してウルつときた。

「じゃ、行こうぜ亀山」

マイケルはユニフォームを肩にかけて部屋を出て行った。

隣の部屋には既に三人選手が来ていた。

二人は全く見たことない選手だったけど、一人は見たことのある選手だった。

小柄で童顔、長い茶髪を後ろで束ねる髪型。

「水種^{みくさ}高校の2番」

水種高校は俺達駒坂高校が選手権大会の一回戦で戦ったチーム。

守備が固く、後半ロスタイムに一点取って何とか1 - 0で勝った。

こいつはその守備の中心人物だ。

「植森博之^{うえもりひろゆき}だよ、駒坂の13番」

13番は俺の駒坂時代の背番号。

「俺は亀山俊彦、こっちは」

「マイケル・仁・ジエームスだ。マイケルでいいぜ」

「よろしく、亀山、マイケル」

残りの二人もこっちに近付いて来た。

「俺にもこれくらいの時が」

「まだ四年前でしょ、大袈裟。俺は公清大学こうせいの松本良明まつもとよしあき、こっちは光破大学こうはの犬飼茂雄いぬかいしげお、よろしく」

公清大学も光破大学も関東大学リーグ1部のチームだ。

「よろしくお願いします」

三人声揃えて一斉に言った。

その時、ドアが開いた。

「盛り上がってんな、若者」

ドアの外から入って来たのは今年アンフィニ清水から移籍してきた元日本代表の攻撃的ミッドフィルダー、田原久敬たはらひさたかさんだ。

さすがに元日本代表だけあって、オーラが違う。

今までTVの中でしか見たことのないプロ選手と明日から練習すると思うと、不思議な気分になる。

田原さんを加えた6人で話していると、「会见始めるんで、集まって下さい」とスタッフの人に呼ばれ、外に出た。

なんかだんだん緊張してきた。

「緊張してんの？」

植森に聞かれた。

何で分かったのだろうか？

「同じほうの手足出てるもの」

確かにその通りだった。

「安心しとけて 注目されてるのは田原さんだけだから」

「そうなの？」

「当たり前だろ」

そこまで言って植森は声を小さくして、

「解雇されたとはいえ、元日本代表だからね。他の無名な選手なんて注目されないよ」

それはそれで悲しい気がする。

「それでは会見を始めます」

会見は一人一人が自己紹介をしていく方式らしい。俺は三番目だった。

一番目は植森。

「植森博之、水種高校出身のセンターバックです。武器はスピードです」

二番目はマイケル

「尊能学園のフォワード、マイケル・仁・ジェームスです。ヘディングが得意なんで競り合いを見て欲しいです」

そして、俺の番が来た。

緊張で足が震える。

「駒坂高校出身、フォワードの亀山俊彦です」

そこまで言って気付いた。

俺の特徴って何だろう？

「絶対に諦めないところが長所です」

とりあえず、いつも姫花流や山原に言われてることを言ってみた。

その後の三人が言い終わると、司会が今年の抱負を聞かれた。

一人目の植森は、

「とりあえず今年試合に出ることです」

二人目のマイケルは、

「5ゴール決めます」

俺の番になった。

「木村選手、今年の抱負は？」

「J1優勝の基礎を作る年にしたいです」

俺がそう言つと会場がざわめいた。

その後四、五人目が終わり、最後の田原さんの番になった。

「田原選手、今年の抱負は？」

「このチームをJ1に上げて、最後の花を咲かせたいと思います。」

また会場がざわめいた。

その後監督の話があり、会見が終わった。

会見が終わり、席を立つと、眼鏡を掛けた身長の高い長い茶髪の女性
性の記者にぶつかった。

「あいたたた」

そついいながら落ちた眼鏡を探していた。

「すみません、大丈夫ですか？」

俺は眼鏡を拾い、渡した。

「あ、ありがとうございます！ 大丈夫ですよ！ 私、たかしろあおは高城蒼波つ
ています！ よろしくお願いします！」

そついつて眼鏡を掛けると、礼をして走ってつた。

「いい女だね」

後ろで犬飼さんが言った。

「犬飼、不謹慎だよ」

松本さんが注意すれと、ほゞいと言って控室に戻つた。

「どこ行つてたんだ高城」

「すみません、すぎうち杉内さん」

「つたく」

「亀山選手に会つて」

「あの謎の男か」

「謎の男？」

「ストライカーのマイケルやスピードのある植森と違って特徴があるわけでないし松本や犬飼みたく実績もないんだよ。なんでプロになれたのか」

「それで謎の男」

「そゆこと。まあいつかわかるだろうがな」

「まったくお前もとんでもないこと言うよな」

控室に入った俺に植森が言ってきた。

「なにが？」

「J1優勝だよ、J1昇格出来るかわからないのに」

「でも元J1だろ？ 名門なんだから」

「今年は間違いなく優勝候補からもれてるぜ、東京は」

マイケルが口を挟む。

「なんでさ？ 去年の主力が移籍したからか？」

「まあそれもあるが J2はお前の思ってるより手ごわいぜ」

マイケルがそう言うと言植森が続く。

「今年の優勝候補は、去年東京と一緒に降格した札幌、去年J1昇格を逃した仙台、大阪、湘南、鳥栖、甲府の5チームって言われている」

植森がそこまで言うと言今度はマイケルが喋る。

「札幌リユミエールは去年は負傷者続出してJ2降格したけど、『鉄のカーテン』と呼ばれる固い守備に加え今年はブラジルのリーグの2部で得点王になった選手を獲得し攻撃力もUPさせたぜ。

レンドイル仙台は去年までであった入れ替え戦に泣き、J1昇格出来なかったが、今年は元オリンピック代表の岩野勇人、いわのいさと丘昇、U-20代表の伊達幹人だてみきとら主力を残留させ、さらにブラジル人選手を補強してチーム力は高いぜ。

アヴァランチ大阪は去年前評判は高かったが、低迷し、4位に終わった。だが、今年は既に日本代表に定着した御倉井司、みくらいつかさ元オリンピック代表の石田穂らいしだみのるに加えて元日本代表の宮本剛をアンフィニ清水から獲得してチームの層はさらに厚くなったぜ。

ヴェント湘南は去年のレギュラーメンバーからフォワードとセンターバックが移籍したけど、J最長196?のフォワード太田洋平おおたようへいや元ブラジル代表の選手もいる。今季は監督も代わって全く新しいチームになるぜ。

リノヴァティオ鳥栖は育成型チームのやり方を変えずに今季も行くみたいだな。だけど若手中心の攻撃陣は勢いがあるし、守備陣にはベテランが揃うバランスのいいチームだぜ。

アヴァンツァーレ甲府は4-1-2-3の攻撃なフォーメーションで挑むみたいだな。センターフォワードの真田和輝さなだかずきやセンターバックの武田滋喜たけだしげきらが破壊的な攻撃を演出するぜ」

「説明ありがとう」

ほとんど頭に入っていないけど。

「でも不可能じゃないだろ？」

俺は植森に振ってみた。

「まあ　ね」

「ならどうせなら高い目標持つといたほうがいいだろ？」

「言っじゃないか、亀山」

今まで黙っていた田原さんがいきなり会話に参加してきた。

「俺もお前に乗るよ　あと僅かなプロ人生、このチームの礎にするさ」

「田原さん　」

「じゃあ俺達も」

「そのほうが楽しそうだし」

犬飼さんも松本さんも乗って来た。

「マイケル達は？」

「まあ、俺達が活躍すればいつかはどのみちそうなるわけだから、別にいいぜ」

「じゃあ俺もその話に乗ろうかな。J1に居たほうがいいし」

「よし、決まりだな」

田原さんが俺と犬飼さんと肩を組む。

「円陣組め、円陣」

6人で円陣を組む。

「J1で、優勝するぞ！」

「オォー！」

第3話寮の住人

入団会見の後、俺はマイケルと植森にクラブの寮に案内された。

身辺整理の関係で、まだ練習に参加してない俺と違い、マイケルや植森は既に練習に参加していて、寮の場所も知っていた。

ちなみに東京ミストラルは今年一番早く、2日前に練習が始まっている（これだけ早い時期に練習が始まったのは」でもかなり早いほうらしい）。

「ここが東京ミストラルの選手寮だぜ」

「ちっちゃいね」

選手寮、というより普通のマンションをちょっとおっきくしたようだった。

「まあそんなに入居者多くないしね でもちっちゃくはないと思うよ？ 全員個室だし 」

「そうなの？」

「ああ。ちなみに今いるのは今年入った新卒5人と天野^{あまの}さんと杉本^{すぎもと}さんと李^りさんの8人だぜ」

「じゃ、入ろうか」

植森が先に俺の部屋に入った。

「お前の部屋はここだぜ」

マイケルも俺の部屋に入る。

俺も、二人について行った。

部屋には家具とダンボール以外何もなかった、当たり前だけど。

ちよつと広い以外は普通の１LDKだ。

「遊び来たよ」

後ろからビニール袋いっぱいのお食べ物や飲み物を持って犬飼さんが入って来た。

犬飼さんはテーブルの上に袋をおくと、そのままソファーに横になった。

「これだけあれば歓迎会できますね」

植森が袋を漁りながら言った。

「ほんじゃみんな呼んで来て」

「ウツス」

そいつってマイケルは部屋を出ていった。

トントン、とノックの音がした。

俺がドアを開けると、茶髪、長髪の茶色の目をした日に焼けた小柄な男、小柄でドレッドヘアの男、ストレートで黒髪の眼鏡をかけた長身の男とマイケルが立っていた。

「遊び来たよ」

4人とも俺を押し分け、部屋の中に入って来た。

「茶髪あまのこつじの人が天野浩司さん、ドレッドの人が杉本正一さんすぎもとしやういち、黒髪リ・イルファンの人が李日晃さんね」

植森が小声で教えてくれた。

「よろしくな」

天野さんが袋を漁りながら言う。

「お願いします」

俺が3人に礼をすると、他の2人も手を振った。

犬飼さんが買って来た材料で植草やマイケルが料理して（植森は意外に料理が上手かった）、出来上がった料理——鍋いっぱい

チユーや唐揚げとマイケルが作ったサラダ——がテーブルの上に並んだ。

「乾パーイ！」

俺達は犬飼さんが買ってきたスポーツドリンクをコップに出して乾杯した。

シチユーや唐揚げをみんなに配っているのは植森だ。

「唐揚げウマ！ シチユーウマ！」

俺がそう言つと、忙しそうにおかわりを配っている植森は微笑みながら「ありがと」と返した。

この勢いで無くなれば、植森の食べるぶんは残らなそうだ。

「そういえば、お前今年のJ2チーム全部知ってんの？」

杉本さんが唐揚げを頬張りながら俺の方を向いて聞いて来た。

「去年の順位順で甲府までは」

マイケルが自分で作ったサラダを食べながら答えた。

「じゃ、教えてやんよ」

もうさっきの説明ほとんど忘れてたんだけどな

「去年8位だった福岡ステパノスは去年のJ2日本人得点王、元日

本代表選手、元韓国代表選手、元U-18ルーマニア代表選手を加え、戦力を格段にあげてる。

去年9位のメジエール草津はエースが抜けたけど代わりに後藤ごとうを加えた。モリス、ネリーノ、郭かくら日本育ちの外国人選手達を中心に初のJ1昇格を目標にしてる。

10位の横浜ナールヴェは何人か中心選手が移籍したけどベテランは全員残留したな。安定した守備は突破するのしんどそうだな。

11位水戸コリエンテは去年のJ2日本人得点王にサイドの選手のクロスにガンガン合わせていく方法は変わらないみたいだ。

12位の熊本シャランジュはエースの立花が抜けて攻撃力は下がったけど守備陣を中心とした守備型チームになる。

13位のバジエーナ岐阜はベテランが一斉に引退して今年は若い選手達を中心にして戦って行くみたいだ。でもキャプテンの明智あけちや副キャプテンの野口のぐち、森もりら去年の主力が中心になるのは変わらないみたいだけだな。

14位のオランジュ愛媛は今年は主力の流出なし。だけど登録選手は今のところJ最小の21人。少数精鋭でシーズンを迎えるがキャプテンの長曽我部ちやうそがへを中心した守備は侮れない。

15位のクレセール徳島は選手を大量に解雇して新しいチームになる。なかでも入船いりふねや等々力とどうりきはJ1出場経験もあるプレイヤーだ。

JFL2位の栃木シエロは今年からJ2に加わったチームだ。キャプテンの鷲田わしたやJ経験豊富な上野うえのら主力をベースに選手を大幅に入れ替えて初のJ2に挑む。

JFL3位のラフィカ富山は去年出来たばかりの新しいチームだ。去年とほとんど変わらないメンバーで挑むみたいだな。だがJ1経験もある柴田しばたや前田まえだら中心に戦力は決して引けをとらない。

JFL4位のイノベータ岡山は今年大量補強して40名を超える。キャプテンの桃井や犬井、雉川、猿山ら中心に若い選手をもり立てながらシーズンを戦って行くみたいだ。今年のJ2はこの18チームが2回戦総当たりで戦って行く」

やっと終わった

杉本さんの話が終わる頃には植森の作った料理は無くなっていた。

食べたのはほとんど李さんで結局植森は食べられなかった。

皆がぐでつとダラけていると、コンコンとドアのノックの音がした。

誰も出ないので仕方なくドアを開けると、知らない女の人が立っていた。

女の人は髪型は茶髪のショートカット、黒い目で白いロングコートを着ていて背が低い。

手には買い物袋を持っている。

「もう歓迎会やってたんだ」

女の人は残念そうに部屋を出ようとする。

「まだ俺食べてないっス」

植森がそう言うと、女の人は嬉しそうに部屋の中に入って来た。

部屋を見渡し、俺を見ると近付いて手を差し出してきた。

「私はここの寮母の宮原月美^{みやはらつきみ}。よろしくね、亀山」

「はあ」

「ホラ！ 握手！」

そう言われて慌てて手を出して握手した。

「さて！ 料理作りますか！」

月美さんはそう言って料理を作り出した。

月美さんが作った料理はかなり美味しかったらしく、植森は嬉しそうに食べていた。

李さんもちゃっかり食べていた。

「そついえば松本は？」

月美さんが尋ねる。

確かに松本さんがいなかった。

「松本は彼女のところ」

犬飼さんがそう答えると、天野さん、杉本さん、李さんは彼女がいることを知っていたらしく、何の反応もなかった。

ただ月美さんやマイケル達は知らなかったらしく、興味ありそうにどんな人が聞く。

「松本の彼女ってどんな人？」

「かみきゆかり
神木夕夏里」

俺は聞いたことのない名前だったけど、月美さんの知ってる人らしく、「ホント？」と犬飼に聞いていた。

「神木夕夏里って誰？」

俺はマイケルに聞いたけどマイケルも知らないらしく首を傾げられた。

「東京ミストラル・レディースに所属するリーガーだよ」

植森が教えてくれた。

東京ミストラル・レディースは東京ミストラルの女子チームらしい（マイケルが教えてくれた）。

「松本さんの彼女ってサッカー選手なんだ」

「みたいだね」

その後、松本さんが帰ってくるのを待った（月美さんがやたら気になったらしく命令された）。

だけど、松本さんはその日帰って来なかった。

第4話初めての練習

歓迎会のあった翌日の朝、ドアをドンドンと叩く音がした。

半分眠りながらドアを開けると、月美さんが立っていた。

「ご飯だよ！ 早くしないと季に全部食べられちゃうからね」

昨日の様子を見てるととても脅しとは思えなかったので、急いで月美さんについて行った。

月美さんについて行った所は寮の裏側だった。

そこには裏口のような扉があつて、上には「食堂」と書いたプレートがあつた。

どうやら食堂のつもりみたいだ。どう見ても食堂には見えないが。

「ここが食堂だからね。朝はここで食事してね」

「昼と夜は？」

「二部練習の時は昼はクラブハウスで食べて、晩御飯はこっちで作るよ。午後練習ならここで全部作るよ——じゃ、入って」

月美さんが『食堂』のドアを開けた。

『食堂』の中ではすでに皆料理を食べ始めていた。

まだ俺の分は残っていた。

俺は椅子に座り、焼き魚や味噌汁など、純和食な朝食を食べ始めた。

正直、昨日の植森の料理より上手かった。

俺が朝食を食べ終わる頃には、皆とつくに食べ終わって、食堂から出ていつていた。

「美味しかった？」

月美さんが聞いてきたから、正直に「はい」と答えた。

すると、月美さんは嬉しそうに、「良かった！」と言い、片付けを始めた。

「これから俺どうすれば？」

「練習行く準備して、誰かに送ってもらって」

月美さんが食器を洗いながら言われた。

部屋で準備をしていると、ドアのノックの音がした。

「早く準備しろ、置いてくぜ」

マイケルの声だった。

どうやら送ってくれるらしい。

「マイケル免許持つてるの？」

「バイクだけだな。早くしないと置いてくぜ」

急いで荷物をまとめてドアを開けた。

階段を下りてると、月美さんが部屋から出て来た。

「いつてらっしゃい！ 練習頑張つて！」

その言葉を言った時の笑顔は今まで見て来たなかで一番綺麗だった。

「行つてきます」

出来るならずっと笑顔見てたかったけど、マイケルを待たせてたから、すぐに駐車場に行った。

練習場に着くと、既に10人前後選手が来ていた。

マイケルが隣のロッカールームに案内してくれた。

「ここがお前のロッカーだぜ」

マイケルが指したロッカーには「亀山俊彦」と名前があった。

ロッカーを開けるとチームの練習着が掛かっていた。

うつすらと涙で前が滲んだ。

「こんなことで泣いてたらきりねえぜ」

マイケルが自分のロッカーにこの前貰ったユニフォームを掛け、着替えだした。

マイケルや植森は練習着だけは貰っていたみたいだ。

「お前は感動しないの？」

入団会見の時もそうだった。

こいつはたいして嬉しそうにしていなかった。

「嬉しいことは嬉しいぜ。でもお前よりは嬉しくないんだろうな、多分」

「何でだよ」

「俺はプロになるとずっと思ってた。それにここがゴールじゃない

ぜ。U-18、オリンピック、日本代表、海外　まだ上はあるぜ。
俺はここにずっといるつもりはさらさらないし、チームの結果に興味ない。ただ俺が活躍出来るかどうかだけだぜ——ここは俺の踏み台に過ぎねえんだよ」

マイケルはそう言って「早く着替えろよ」と言って先に練習に行った。

しばらくすると、眼鏡を掛けた茶髪の人、髭を生やした長髪の人が入って来た。

「お、今年のルーキーじゃん？」

眼鏡の人が話し掛けてきた。

「俺、鳳尊おおとりみこと。こっちは——」

「角田和紀かくたかずきだ」

眼鏡を掛けた方が鳳さん、髭、長髪の人が角田さん。

「亀山俊彦です、よろしくお願いします」

「よろしく」

角田さんはそう言って着替え出した。

俺は着替え終わって外に出た。

練習場に行くと、ボールを使って練習を始めていた。

あちこちで4対2や3対1が行われていた。

その中で一人シュート練習をしていた。

マイケルだった。

マイケルが誰かGKに手伝ってもらってシュート練習をしていた。

「亀山！」

3対1の練習をしていた杉本さんに呼ばれ、輪の中に入った。

30分位すると、全員集まった。

選手とコーチを合わせると35名ぐらいらしいが、帰国し、まだ帰って来ない選手もいるから今は30名くらいだろう。

監督が頃合いを見計らって笛を吹いた。

選手が皆監督の近くに集まる。

この監督は新庄豪しんじゆうといって、元日本代表でエース、ワールドカップ予選で何度もゴールを決めている。

監督としては一度別なチームを昇格させたいらしい。

新庄監督とは昨日も会ったけど話してない。

昨日はスーツを着ていたが、今日はジャージ姿だ。

かなりダンディーな人で、昨日のスーツは似合っていたけど今ははつきり言って似合っていない。

「練習を始める前に今日から練習に参加する選手から自己紹介してもらおう」

そう言って「亀山！」と俺の名前を呼んだ。

しかたなく前に出て昨日と同じように自己紹介した。

また優勝宣言した時にはどよめいたけど、自己紹介が終わると拍手してくれた。

チームの一人として認められたみたいで嬉しかった。

第5話紅白戦

練習が始まって3日経った。

フィジカル練習はつかやつててかなり疲労はたまってきたけど、かなり充実してる。

今日もマイケルに送ってもらい、練習場に着いた。

まだ練習が始まっていないピッチではすでにボールを使って練習してる選手がいる。

「カメ亀山！ 急げよ！」

副キャプテンの宮原保さんみやはらたもつが叫ぶ。

いつも植森や宮原さんや天野さん、ディフェンダーの新垣正義さんあらがきまさよしや清水真琴さんしみずまことにまけてもらうのが俺の日課になっていた。

マイケルはこのチームのキャプテンでゴールキーパーの山下洋明さんやましたひろあきにキーパーに取りづらいシュートの打ち方を教わっている。

宮原さんは4年前に浦和ティグレから移籍してきたディフェンダー。

左サイドバック、右サイドバック、センターバックをこなす東京のディフェンスの中心の選手で、走力、サイズ、フィジカルと恵まれた身体能力の高さをいかすディフェンスをする、8年前のオリンピックのメンバーの一人。

一応月美さんの兄らしいが全然似てない。

清水さんは宮原さんと同じ年にパンテラ神戸から移籍して来たベテラン選手。

典型的な王様タイプ、つまり守備をあまりしないパサーだ。

あんまり性格がいいとは言えない人だ、と植森が言っていた。

山下さんは東京ミストラルのユースの元となるチームから入団したミストラル一筋の人で、日本代表候補に選ばれた事もあるベテランだ。

練習の時間になるまで、ボールを使って練習してた。

「なんか選手多くなってるじゃない？」

練習の休憩中に植森に聞いた。

昨日よりも人数が多くなっている気がした。

「今更気付いたの？」

植森が呆れ顔で答える。

「練習生とかいるからね、始動の時より5、6人多いよ。」チームはだいたい所属選手以外の選手がいるよ。今日はボール使った練習するから呼んだんじゃない？ 今日の調子がいい練習生はキャンプ

に呼ばれるんだよ」

「へえー」

「今日はユースの選手も呼ばれてるみたいだけど」

その時、監督の笛の音がした。

「紅白戦するから呼んだらビブスもらいに来て」

監督がそう言ってチームを分けたした。

俺のチームは3 - 5 - 2のフォーメーションで、フォワードはマイケルと俺、攻撃的ミッドフィルダーに田原さん、左サイドに犬飼さん、右サイドに杉本さん、守備的ミッドフィルダーに李さんと鳳さん、センターバックは角田さん、新垣さん、宮原さん、ゴールキーパーは山下さんだ。

相手チームも同じフォーメーションだ。

20分ハーフの紅白戦開始の合図の笛が鳴る。

相手ボールから始まった。

相手のバックパスをチェイスする。

相手が守備的ミッドフィルダーの位置までボールを下げると、右サイドにボールを出した。

相手の右サイドの選手がドリブルで杉本さんを抜こうとするが、杉本さんが奪って逆にそのままドリブルで持っていく。

そのままペナルティーエリアの外側までドリブルで進み、ファーストにいるマイケルにセントリングを上げる。

マイケルが上手く合わせ、ヘディングでゴールを狙ったが、相手ゴールキーパーの松本さんが弾いてコーナーキックになった。

ペナルティーエリア内には俺の他にマイケル、犬飼さん、鳳さん、角田さんがいる。

コーナーキックのキッカーは田原さんだ。

精度の高いハイボールをニアサイドにいた角田さんが頭で合わせた。

ボールは松本さんが弾いたが、こぼれ球がマイケルの目の前にこぼれる。

左足ボレーでゴールを決めた。

マイケルはたいして喜びもせず、キックオフの位置に戻った。

ゲームが再開し、相手ボールから始まった。

再び守備的ミッドフィルダーが右サイドに出す。

今度は右サイドの選手が攻撃的ミッドフィルダーの清水さんにパスを出し、トップ下の選手がスルーパスを出した。

スルーパスが天野さんに渡り、そのままドリブルで進む。

新垣さんを抜いてシュートを打ったが、シュートは山下さんがキャッチしそのままマイケルに向けて蹴った。

マイケルがヘディングで俺に落とす。

ボールをトラップしてドリブルで進み、そのまま相手ディフェンダーを一人抜いた。

しかし、抜いた瞬間にガツンとぶつけられる。

ボールを奪われカウンターとなった。

「ユース選手に奪われてんじゃねえよ！」

杉本さんが戻りながら叫ぶ。

俺もすぐに守備をするため戻る。

ボールはもう相手の右サイドまで運ばれた。

右サイドから精度の低いセンタリングが上がる。

クロスは角田さんがヘディングでクリアしたが、クリアボールを清水さんが直接打った。

ボールは山下さんの手をかすめネットを揺らす。

同点になった。

今度はこっちのボールで始まる。

始まってしばらくはボールが行ったり来たりだったが、宮原さんがボールをマイケルに出すと、マイケルが田原さんにダイレクトで繋げた。

田原さんはダイレクトで犬飼さんにパス、犬飼さんはマイケルとのワンツーパーズで相手を抜き、俺の胸元にパスを出した。

胸でトラップすると、さっきのユース選手がボールを奪いにくる。

ユース選手に背を向け、ボールをキープ、走ってきた田原さんにバツクパス、そのボールを田原さんが杉本さんにダイレクトでパスした。

俺がユース選手を抜いてフリーでペナルティーエリアに入ると杉本さんがクロスを上げる。

俺がヘディングで合わせるとボールはゴールに向かっていったが、松本さんに弾かれた。

その弾かれたボールは俺の前にこぼれ、ダイビングヘッドでゴールに押し込んだ。

これで再び勝ち越した。

田原さんに頭を軽く叩かれた

「ナイスシュート」

この後、両者得点出来ず、俺もあまり活躍出来ず終わった。

「次の紅白戦出ない人は紅白戦出る人にビブス渡して」と言った監督に従い、次の出番の植森に渡して休んでいると、さっきのユース選手が近づいてきた。

俺より背が高く、まさしく大型センターバック、といった感じの選手だ。

「俺、天野浩司の弟で淳敏^{あつと}っていいいます！ よろしくお願いします
っ！」

そういえばどこか天野さんに似ている。

「亀山俊彦です」

「そんなっ、敬語なんて使わなくていいです！」

「そう？」

「はいっ！」

淳敏は「それではまた！」と言って走って言った。

「元気だね」

いつの間にか隣にいた犬飼さんが言った。

清水さんもいる。

「あいつU-17のキャプテンなんだよね。東京はユースはまだ名門だからね。優秀な選手が多いんだよね。あいつの他にもフオワードにも一人、ミッドフィルダーに二人代表がいるからね」

知らなかった

「だからと言ってもプロなら抜けて当然だがな、小僧」

清水さんが薄笑いを浮かべる。

確かに植森の言う通り、あまり性格はいいとは言えないのかもしれない。

練習が終わり、着替えていると、マイケル、植森、松本さん、犬飼さんの四人がスタッフに呼ばれた。

雑誌の取材らしい。

「んじゃ行ってくるぜ」

マイケルがそう言って四人がクラブハウスに入っていった。

「何の取材だ？」

田原さんが天野さんに聞く。

「週間」の『今年の新人ベストイレブン』だと思いますよ」

『週間』はJリーグだけを取り上げる日本では珍しい雑誌だ。

俺だけベストイレブンに入らなかったのか　って、俺は無名だから当たり前だけだ。

「来週あたりに載るんすかね」

「キャンプ地で買えるかもな」

そう、明日と明後日は休み、その次の日から宮崎キャンプが始まる。

そこからは外国人選手も参加し開幕戦メンバー入りを狙うサバイバルが始まる。

第6話つかの間の休息

宮崎キャンプの前日、俺はまた月美さんに起こされた。

「早く来ないと季に全部食べられるよ!」

毎朝この言葉と共に起床するようになった。

『食堂』に行くと、いつも通り美味そうな朝食が用意されていた。

朝食を食べていると、誰かの携帯が鳴った。

植森がポケットから携帯を取り出し、メールを打った。

「行儀悪い!」

月美さんにコツンと軽く叩かれる。

「で、誰からのメール?」

月美さんが携帯を覗こうとしているけど、植森が必死に阻止している。

隣にいたマイケルが「誰からだと思う?」と聞いて来た。

「さあ? マイケルはどう思うの?」

「やっぱりコレだろ」

そう言いながら小指を立てる。

「植森って彼女いるの？」

「さあ？」

マイケルがさっきの俺と同じように首を傾げた。

騒がしい朝食の時間が終わるとあっという間に暇になった。

マイケルや犬飼さんはどこかに出かけ、松本さんも彼女のところに
出かけて行ったらしく今はいないし、天野さんは弟の練習を見に行
くと言って出かけ、杉本さんは買い物に出かけた。

暇だから植森と練習しに行こうと準備してたら、玄関からチャイム
の音がした。

ドアを開けると、月美さんと李さんがちょっと変装してるつもりっ
ぱい服装をして立っていた。

「植森を尾行するよっ！」

「はあ？」

いきなり何言い出すんだこの人は。

「植森がさ、こっそりどこか出かけたんだよね、気になるよね？」

「全然」

はつきり言って全く興味がない。

「まあそう言わずに　ね？」

月美さんの顔が某CMのチワワみたいになる。

「　分かりました」

完全に負けた。チワワ顔に。

そんな訳で植森を見失わないように頑張って尾行した結果、カフェに着いた。

植森が入ったので、俺らも入った。

植森がぎりぎり見える席に座った。

「カフェで一人なんて　怪しいねっ！」

ぶっちゃけこっちの恰好のほうがおかしい。

「誰かと会ったのかな？」

月美さんは完全にウキウキしてる。

李さんは黙って頼んだコーヒーを飲んでいる。

しばらくすると、背の高い女の人が入って来た。

スポーツ選手のような体つきで、ジャージを着ていた。

サングラスをしていて顔はよくわからない。

「あれ、おつみえる近江紫絵瑠じゃない？」

近江紫絵瑠は女子サッカーU-18日本代表の大型——身長178センチ——エースストライカーでU-18のワールド杯大会ベストイレブンと得点王にもなった選手だ。

アイドル顔負けのルックスと去年日本代表にも選ばれたことでテレビでかなり話題になり、かなりの人数のファンがいるらしい。

後ろ姿は似ている気がする（ってもニュースでしか見てないけど）。

「近江さんも東京ミストラル・レディースの選手なんですか？」

月美さんに聞くと首を横に振った。

「あの人は確か浦和のはずだけど」

「ってことは、わざわざ東京まで」

「会いに来たってことだね」

女の方はサングラスを外した。

二人は楽しそうに会話している。

10分くらいすると、二人でカフェを出た。

月美さんの言う通りやっぱり近江さんだった

近江さんはサングラスを店から出る直前につけた。

近江さんは植森より背が高く、二人で並んでいるとカップルと言うよりも仲の良い姉弟のようだ。

「じゃ、帰りますか」

俺がそう言つと、月美さんが嫌そうな顔をする。

「えゝもうちよつとゝ」

「駄目です」

「えゝ」

「帰りますよ」

嫌がる月美さんを李さんと二人で文字通り引きずって帰って来た。

植森が帰って来たのは夜だった。

『食堂』で飯食ってるって植森が入って来た。

「デートどうなったの？」

いきなり月美さんが聞いた。

植森は「何で知ってるんですか？」とあわてふためいている。

いや、尾行されてんの気付けよ、すぐ分かるだろ、と脳内ツッコミを入れる。

月美さんが色々聞いているが植森は全く答えない。

飯を食い終わり『食堂』を出た。

自分の部屋に戻ってからしばらくすると、玄関からチャイムの音がした。

ドアを開けると植森がいた。

「お前も見に来たんだって？」

俺が頷くと植森は溜息をついて頭を掻いた。

「誰にも言つなよ」

マスコミがかなり注目してる選手だし、変な所で話題を作るのが嫌

なんだろう。

「分かった」

「よかった」

植森がホッとしている。

「とりあえず中入れよ、色々聞きたいし」

俺はそう言って植森を中に入れた。

植森は中に入るとソファーに座った。

俺は植森の向かいに座る。

「いつ知り合ったの？」

まずは一番聞きたかったことを聞く。

「高校の時。同級生なんだよ、紫絵瑠^{あいづ}。入学してからずっと学校の有名人だった」

「何で？」

近江さんが代表に選ばれたのもU-18代表のワールド杯も去年の話だ。

「中学の時から浦和・レディースの選手なんだよ」

「そんなこと出来るの？」

「一応ね。練習に参加してただけだけど。高校2年からはプロ契約した」

「お前より先輩なんだ」

冗談のつもりだったけど、植森は全く笑わなかった。

「そうだよ。だからあいつより活躍しなきゃいけないんだよ。『近江紫絵瑠の彼氏』じゃなくて『植森博之の彼女』にするためにはだからJ1だったこのクラブを選んだ。J1で活躍すれば有名になれるから。紫絵瑠^{あいつ}には負けたくないんだよ」

植森が真剣な顔で言う。

「だからまずはこのチームでレギュラーをとって、昇格させる。それからチームをJ1定着させる。段階を踏んでから優勝を目指すさなきゃね」

嫌味を言われた気がした。

「悪かったね」

「別に、いつかは優勝したいし」

植森はそう言って立ち上がる。

「だから協力はする」

植森はそう言って出ていった。

第7話キャンプ

宮崎キャンプに行く当日、いつも通り月美さんに起こされ、朝食を食べた。

昨日、植森が帰った後に手荷物は準備したから、もう後は行くだけになっていた。

マイケルに送ってもらったために『食堂』で待っていると、月美さんが話しかけてきた。

「今日から一ヶ月頑張ってねっ！」

明るい言葉のトーンとは裏腹にどこか悲しげに見えた。

「どうかしたんですか？」

「何が？」

その続きを言う前にマイケルが扉を開けた。

「行くぜ、亀山」

食堂に運んであった手荷物を持って（ちなみにスーツケースはもうクラブに持っていてある）食堂を出る。

「いつてらっしゃい」

そう言った時もどこか寂しそうな顔をしていた気がした。

クラブに着くとバスの前にみんな集まっていた。

「遅いぞー」

「すいませーん」

急いでバスに乗り込んだ。

イヤホンで音楽を聴いている植森の隣に行く。

マイケルは後ろの方に座った。

バスが出発した。

空港に着くと30人くらいのサポーターが駆け付けていた。

「頑張つてー!」

「ケガするなよー!」

サポーターの声援を背にエスカレーターで上がる。

隣にいたマイケルに月美さんのことを聞こうとしたが、マイケルは何か苛立っている。

「うるさいぜ」

マイケルがつぶやく。

「そういうこと言わないの、ありがたいことなんだから」

植森が小さな声で注意した。

キャンプ地に着くと、施設の人達が歓迎してくれた。

マイケルはまた「うるさい」と文句を言っていた。

何となく言うタイミングではないような気がして、言うのをやめた。

施設の人達に施設を案内してもらい、部屋に行った。

俺はマイケル、植森と相部屋だった。

月美さんのことを話そうとしたらすぐに二人ともどこかに出かけた。

しょうがない、本人に電話するか

財布を持って公衆電話のあるところに行った。

公衆電話は玄関にあった。

テレフォンカードを入れ寮に電話を入れる。

すぐに月美さんは電話に出た。

「もしもし」

電話の声はいつもの元気な声と違う気がした。

「月美さん？」

「亀山？　どうかしたの？」

心配になって　なんて照れ臭くて言えない。

「いや　なんか元気なさそうだったから」

「そんなことないよ！　何言ってるの！」

その声は泣き声のように聞こえた。

「泣いてるんですか？」

「泣いてなんかないよ、気のせいでしょ」

「　　涙声ですよ」

「えっと　玉葱切ってたんだよ！」

「安いから明後日買うつていてたじゃないですか」

「うっ
」

「月美さんって嘘ド下手ですね」

「う、うるさいな！」

「で、なんで泣いてたんですか？」

「笑わない？」

「笑いませんよ」

何か大変なことが起こったのか。

緊張して、手に汗がにじむ。

が、月美さんの口から出た言葉は以外なものだった。

「寂しかったから」

小さな声で、ぽつりとつぶやくように言う。

「は？」

「みんながいなくなって寂しかったの！」

なんか拍子抜けする。

緊張の糸が解けた。

「ふふ ははっ！」

「ちよつと、笑わないっていったじゃん！ だから言いたくなかったのに！」

「だって——ははっ！」

「もう！ 笑い過ぎだよ」

また泣き声になって来た。

「あ、ちょ、泣かないで下さいよ」

「じゃあ もうちよつとだけ このまま 話してていい？」

子供が甘えるような声で言う。

「うん だめ？」

「いいですよ」

その後、5分くらい話して、明日また電話することを約束して、受話器を置いた。

第8話三蹴士（前書き）

『内は外国語で話しています』

第8話三蹴士

キャンプが始まって10日経った。

キャンプに来る前より辛いフィジカルトレーニングのせいで、体のあちこちが筋肉痛だ。

それはマイケルや植森も同じらしく、いつも部屋に戻れば、すぐにぐったりとベットに倒れ込んでいた。

誰も口を開かず、そのまま寝てしまうこともあった。

そんなきついフィジカル練習が終わり、ようやく戦術練習が始まった時、練習着を来た外国人が三人やって来た。

『やっと来たか、三人共』

監督がスペイン語で三人に言う（ちなみに翻訳の仕事をしている姫花流の母親から教えてもらったから俺も喋れるし、聞きとれる）。

「誰？」

側にいた植森に聞く。

「東京の外国人だよ。全員アルゼンチン人。褐色で髪が赤いのがフオードのフラビオ・ペルセベス。肌が黒くてスキンヘッドなのがボランチのブエゴ・ボカティージョ。髪長いのがセンターバックの

ピサロ・フェルナデス」

植森が一人一人説明してくれた。

三人共すぐに練習に入る。

この時はまだこの三人との力の差を――

俺は知らなかった。

今回はサイドからセンタリングを上げ、攻撃側がゴールを狙う練習だ。

まずはフラビオと角田さんが呼ばれた。

フラビオは角田さんより20センチくらい小さい。

クロスを上げるのは田原さんだ。

コーチの笛が鳴る。

田原さんがクロスを入れる。

ゴール前で二人が競り合う。

フラビオが助走なしで跳び、角田さんにぎりぎり競り勝ち、ゴールを決めた。

ありえないくらいの跳躍力に声を奪われる。

「次、マイケルとピサロ！」

マイケルとピサロが呼ばれる。

田原さんがクロスを入れ、ピサロとマイケルが競り合う。

身長ではマイケルの方が勝っていたが、ピサロはマイケルをはじき飛ばし、マイケルは肩から落ちた。

マイケルはうずくまっ たまま立ち上がらない。

監督やトレーナーがマイケルの周りに集まり様子を見る。

そのまま宿舎に連れて行かれた。

その後、まるで何事もなかったかのように練習が続いた。

「選手が怪我した後だって言うのに、誰も心配とかしないのか
って顔してるな、小僧」

隣に立っていた清水さんに見抜かれていた。

素直に頷く。

「甘すぎるな、小僧。そんなことだから非現実な目標を立てて
しまっただな」

相変わらず口がすごぶる悪い　　というか嫌味な人だ。

「　ここはクラブ活動ではない、俺達はプロだ。誰かを蹴落としても成り上がらなければいけない。蹴落とす機会を作る奴が悪いんだ」

静かに低い声で、まるで呟くような言葉だった。

次の練習は1on1だった。

始めは天野さんとブエゴからだ。

ゴールキーパーの山下さんからボールが出され、それをトラップして始まった。

ブエゴがすぐに距離を詰める。

天野さんが右に行くフェイントをかけ、ブエゴを左から抜いた。

そのままドリブルしようとした瞬間にブエゴがボールに後ろからスライディングした。

見事にボールだけに足をあてて、ボールを奪った。

半端じゃない反射神経とディフェンス力だ。

「次、フラビオと宮原」

今度はフラビオが山下さんからボールをもらった。

フラビオはでドリブルで宮原さんの前まで行くと左、右と二度続けてフェイントをいれて股を抜いた。

さらにドリブルで進み山下さんをキックフェイントでかわして無人のゴールに蹴りこんだ。

スピードもテクニックも兼ね備えることを見せ付けるプレーだった。

「次、亀山とピサロ」

俺の番が来た。

山下さんからボールを受け取り、ドリブルした。

マイケルよりフィジカルが弱い俺がまともにぶつかればじきとばされるのは目に見えていた。

だからスピードで抜くしかない。

フェイントを使いピサロを抜き山下さんと一対一の状況を想像した。

ピサロが近くに来た。

ボールを止め、右に大きく踏み込む。

ピサロがつられる。

俺がアウトサイドで抜いた――はずだった。

だけどピサロはすぐにショルダータックルを仕掛けて来た。

もろにぶつかり、飛ばされた。

なんとか受け身をとって怪我だけはしなかった。

「ワルい、ダイジョブか？」

片言の日本語で話し掛けて来た。

俺が頷いたら安心そうに微笑んだ。

『ピサロ！ 今のファールになるぞ！』

天野さんがスペイン語で叫ぶ。

『分かってるよ！』

ピサロがそう言い返して元々いた場所に戻った。

宿舎に帰ると、マイケルがいた。

「肩、大丈夫か？」

「ただの打撲だぜ。心のダメージは大きいけどな
で負けた事なかったから」

今まで空中戦

こいつぐらいでかけりゃ普通そうそう負けないだろう。

ピサロが凄すぎるんだ、と信じたい。

「これが」2レベルって言うならさっさと超えなきゃならねえぜ」

マイケルはそう言って部屋に戻った。

第9話コンバート

キャンプ12日目。

今日は戦術練習を中心に練習が進む。

フォーメーション練習の前に監督から話があった。

「東京は去年J1から降格したが主力が多数移籍したチームだ。守備を固めるチームや逆に攻撃的に来るチームがあるだろう。だからお前らには状況に応じて様々なフォーメーションをやってもらおう。本来の位置とは違うポジションになる奴もいるが開幕までには与えられたポジションをこなせるようになってもらおう。いいな　じゃあ言われたとおりのポジションについてもらおう」

監督はそう言ってポジションと名前を呼んでいく。

「亀山！　お前はフォワードだけだ」

俺のポジションの変更はなかった。

「紅白戦で試すからビブスを来て試合するぞ」

こっちは4-4-2のフォーメーションで、ゴールキーパーに山下さん、左サイドバックに昨年までセンターバックだった宮原さん、センターバックに角田さん、ピサロ、右サイドバックに新垣さん。

左サイドハーフに本来は守備的ミッドフィルダーの李さん、守備的ミッドフィルダーにセンターバックの植森と坪井さん（26歳で大学卒業後あまり試合に出てない控え選手、と植森が言っていた）。

右サイドハーフに本来は左サイドハーフの犬飼さん。

フォワードに俺と本職は攻撃的ミッドフィルダーの田原さんが入る。

相手側は4-3-1-3のフォーメーションでゴールキーパーには松本さん、センターバックには木田^{きた}さん（2年前広島から加入した選手でまだ試合経験のない選手、と植森が言っていた）と本来は守備的ミッドフィルダーの鳳さん、右サイドバックには本職は右サイドハーフの杉本さん。

左サイドバックには練習生が入る。

左サイドハーフには野村^{のむらやま}芳樹さん（去年湘南から加入したミストラルユース出身の選手で、マークについた相手選手を観察し、一瞬の隙を突いて抜き去るドリブルが持ち味。ユース昇格後は出場機会を求め様々なチームに移籍していた、と天野さんが教えてくれた）。

守備的ミッドフィルダーにはブエゴ、右サイドハーフに本来はFWの天野さん、攻撃的ミッドフィルダーには清水さん。

左ウイングにはフラビオ、センターフォワードにはマイケル、右ライトウイングには戸瀬^{とせ}さん（大学卒業後いまだに試合に出てない控え選手、と植森が言っていた）。

試合が相手ボールから始まった。

守備的ミッドフィルダーのブエゴまでボールを下げる。

俺がプレスに行くと、すぐに左サイドバックの練習生にボールを出した。

練習生がドリブルでハーフウェイラインまで進むと清水さんにボールを出す。

清水さんはダイレクトでウイングのフラビオに出し、フラビオはヒールパスを野村さんに出す。

野村さんがクロスを上げ、マイケルとピサロが競り合う。

マイケルが競り勝ち、ゴールを狙ったが、山下さんがキャッチし、すぐにキックする。

そのキックを植森が中盤で受け取ると左サイドの李さんに渡す。

李さんがドリブルで持ち込み、天野さん、杉本さんを抜き低い弾道のセントリング上げたが、普段上げ慣れていないからかクロスは的外れな方に行く。

急いでボールの着地点に行き、追い掛けて来た木田さんより早くボールをトラップする。

そのまま木田さんを抜いてシュートした。

松本さんに弾かれたが、こぼれたボールに突っ込む。

低空ダイビングヘッドで押し込んだ。

その時、鳳さんがクリアしようとした蹴りが頭に当たった。

「悪いっ！ 大丈夫か！？」

「だ、大丈夫っス」

かなり痛かったけど

その後もこっちがカウンター中心に攻め、得点を奪う。

相手はフラビオ、マイケル、清水さんの三人が守備をしない為、攻撃では猛威を振るが、一度奪われるとカウンターの餌食になる。

はつきり言ってあまり機能していない。

こっちも攻撃的な選手が少ししかいないからカウンターでしか点が取れそうもない。

点が入っていないからリードをした時、試合をクローズする（リードをした際、守りきって試合を終わらせること。基本的にディフェンダーを入れて守りきる。）時には使えるかもしれない。

そんなことを考えながらプレーしていたら監督が笛を吹いた。

「次、フォーメーション変えるぞ」

今度はこっちはフォーメーションは4 - 4 - 2でゴールキーパーに山下さん、左サイドバックには宮原さんが、センターバックにはピサロと角田さんが、右サイドバックには杉本さんが入る。

左サイドハーフには野村さんが、守備的ミッドフィルダーに李さんと田原さん、右サイドハーフには天野さんが入る。

フォワードは俺とフラビオだ。

フラビオは俺と同じ172センチで、ぱつと見ただけでは190センチぐらいある角田さんにとっても勝てそうには見えない。

相手のフォーメーションは4 - 4 - 1 - 1でゴールキーパーに松本さん、左サイドバックに坪井さんに、センターバックに新垣さんと木田さん、右サイドバックは植森。

右サイドハーフに練習生、守備的ミッドフィルダーにブエゴと鳳さん、右サイドハーフに犬飼さん。

攻撃的ミッドフィルダーに清水さん、フォワードにマイケルが入る。

相手ボールから試合が始まる。

相手は守備的ミッドフィルダーの鳳さんまでボールを下げる。

フラビオがプレッシャーを全くかけないから、俺が行く。

鳳さんが練習生にパスを出すと、練習生は天野さんを抜き、そのま

まドリブルで進む。

練習生がペナルティーエリアに入る直前でクロスを入れる。

クロスにマイケルが上手く合わせたけど、山下さんが弾く。

こぼれていたボールをピサロがクリア、それを俺が拾う。

鳳さんがプレッシャーをかけてくる。

俺が天野さんにパスを出す。

天野さんが得意のドリブルで一氣に進み、途中俺とのワンツーで坪井さんを抜き、クロスを上げる。

フラビオは高く飛び上がり、180センチ近い木田さんにらくらく競り勝った。

フラビオのヘディングはゴール右隅に決まった。

『いつになく本気じゃないか、フラビオ？』

『うるせえよ、ブエゴ』

『あてられたかい、あの子のプレーに』

『うるせえって言うてるだろ』

ブエゴとフラビオが俺に離れてそんな会をしてることを、俺は当然知らなかった。

この試合はこっちのチームが圧倒的に攻め立てた。

この後、色々な組み合わせを試し、練習が終わった。

練習後、着替え終わり宿舍の部屋でマイケル、植森と話していると天野さんが『週間J』を持って入って来た。

「お前らのつてたよ、ほら」

天野さんが指を挟んでいたページを開く。

そこではJ2のチームに所属するルーキーの中から選ばれた15人が出ていた。

マイケルは『今後10年出てこない大型ストライカー』、植森は『相手FWを自由にさせないスピードキラー』と紹介され、少し二人のコメントが出ていた。

天野さんによると、去年はFWに有力な選手がいなくてゼロトップだったらしい。

「今年は3人もFWいるからな」

フォワードにはマイケルの他に日大工業高校から水戸コリエンテに加入した『短気なスピードスター』片岡星彦、アヴァランチ大阪ユースからアヴァランチ大阪に昇格した『次世代型ストライカー』姫風理央が選ばれ、サブにもう一人札幌リユミエルユースから昇格した『雪国育ちのゴールハンター』西園寺細雪が書いてある。

攻撃的ミッドフィルダーには東京シユトルツユースから熊本シャランジュに加入した『和製ジダン』久米新、守備的ミッドフィルダーに日大工業から水戸コリエンテに加入した『水戸にやってきたスーパーマン』山口都河士、桜青学院大付属高校からレンディル仙台に加入した『桜の国からやって来たエリート』龍道千足、リザーブに明極高校からリノヴァティオ鳥栖に加入した『勤勉な天才』水原夢人、極句高校からヴェント湘南に加入した『Mr. ポリパレント』平山有矢が書かれていた。

サイドバックには札幌リユミエルユースから札幌リユミエルに昇格した『雪の王子様』五月雨大河、東新高校から水戸コリエンテに加入した『東新を支えた影の男』上田刀麻、リザーブには柏井工業高校からリノヴァティオ鳥栖に加入した『気障なサイドの魔術士』三鷹蘭東が書かれている。

センターバックには椿川学園からアヴァランチ大阪に加入した『超・攻撃的CB』名田尋斗、リザーブには日大工業から熊本シャランジュに加入した『新・熊本の壁』蒲田未来、GKにはバジェーナ岐阜に加入した『ゴール前の巨人』川原光示が書かれていた。

「大変だね、亀山」

天野さんはそう言って雑誌を持って部屋を出て行った。

「大変つて？」

「U-18代表だろ？ 今年の夏だぜ、確か」

正直全く自分と関係ない世界なので気にしていなかった。

「代表か」

「ま、クラブでアピールしなきゃだけどね」

植森がそう言つてマイケルを見る。

「三日後からの練習試合で結果残すしかないぜ」

「三日後練習試合なの？」

知らなかった

「お前本当に人の話聞いてないよな」

植森は呆れ顔だ。

「徳島とだよ。さらにその三日後栃木と。」

「じゃそこで結果残せばいいんだ」

「ま、そうだけどね」

俄然やる気が——勿論元からあったけど——出てきた。

第10話練習試合対徳島戦

キャンプ15日目。

今日のクレセール徳島との練習試合は1本30分で2本で行われる。

1本目はゴールキーパーに山下さん。

センターバックに宮原さん、角田さん、ピサロ。

守備的ミッドフィルダーにブエゴと李さん。

右サイドハーフに杉本さん、左サイドハーフに野村さん。

攻撃的ミッドフィルダーに田原さん。

フォワードにはフラビオと天野さんが入った。

試合が始まる。

最初のチャンスは開始直後、ブエゴが杉本さんにパス、杉本さんがドリブルでサイドを駆け上がり、相手ペナルティーエリアの横でセントリングを上げる。

フラビオ、天野さんに渡らず逆サイドまで流れたが、いきなりチャンスを作った。

その後も両サイドハーフの野村さん、杉本さんの突破からチャンスを作る。

ゲームが動いたのは前半6分だった。

野村さん、杉本さんに気をとられていた相手から敵陣でボールを奪った天野さんがドリブルでペナルティーエリアに入ったところでフアールで止められPKを獲得。

それをフラビオがGKが飛んだ方向と逆のゴール右上の隅に決め先制。

さらに14分にも相手ゴール近くからのスローインを天野さんがもらい相手を抜きクロス、それをフラビオが頭で決めた。

さらに27分、相手のパスをカットした李さんが蹴ったロングボールの処理を相手のDFがヘディングをミスし、後ろにそらしたボールをフラビオが拾いフリーの味方がいたがそのままドリブルでGKを抜き三点目。

最後に自陣からドリブルして来た天野さんが相手ゴール前で倒されて得たFKを田原さんが直接決めて4-0で試合を終えた。
フリーキック

2本目にはメンバーと配置をがらりと変え、ゴールキーパーに松本さん。

センターバックに角田さん、新垣さん、ブエゴ。

守備的ミッドフィルダーに李さんと田原さん。

右サイドハーフに練習生、左サイドハーフに野村さん。

攻撃的ミッドフィルダーに清水さんが入り、フォワードには天野さんと俺が入る。

試合が再開された。

相手ボールから始まった。

相手は守備的ミッドフィルダーまで下げる。

俺と天野さんがプレッシャーをかける。

守備的ミッドフィルダーは右サイドハーフにロングパスを出す。

ボールをもらった右サイドハーフが野村さんを抜き、そのままドリブルでサイドを駆け上がる。

ペナルティーエリアの横に來るとクロスを上げた。

相手の長身フォワードが角田さんに競り勝ちクロスに合わせたがシュートは松本さんが右手一本で止めた。

すぐに松本さんが前線にロングパスを出す。

天野さんがそれを受け取る。

ワンタッチで相手を抜き、俺にパスを出した。

俺がワントラップして前を向くと、相手ディフェンダーは既に近くまで来ていた。

ディフェンダーとは逆の方に清水さんが立っていた。

清水さんにパスを出す。

清水さんはダイレクトで俺にスル－パスを出した。

鋭いパスに俺が合わせられず、ゴールラインをわった。

清水さんに謝ろうとして清水さんの方を見ると既に背を向けて歩いていた。

「ドンマイドンマイ！」

天野さんが逆サイドから励ましてくれた。

試合は一進一退の攻防が続いた。

2本目最初のゴールはコーナーキックからだった。

9分、清水さんがニアサイドにボールを出すと待っていたブエゴが頭で合わせゴールネットを揺らした。

得点直後に野村さんに代わって犬飼さんが入る。

すると犬飼さんがドリブルで相手をスルッと抜きチャンスを作る。

だけどクロスの精度が悪くて——合わせる俺達の背が低いせいもあるだろうけど——なかなか得点に結び付かない。

185センチと長身の清水さんはエリア内に入らないし、ボールを奪われても守備をしない。

代わりに俺と天野さんが守備に回る。

実質清水さんのワントップだ。

そんな中、ブエゴが田原さんからのバックパスをトラップミスし相手の長身フォワードにボールを奪われる。

1対1を難無く決められ、同点に追い付かれた。

その直後、ブエゴと田原さんに代わって植森と鳳さんが入った。

試合が再開する。

鳳さんまでボールを戻し、鳳さんが練習生にロングパスを出す。

練習生はそのままドリブルで上がり、ペナルティーエリア敵陣の真ん中辺りで、スペースに横パスを出す。

そのパスに鳳さんが反応していた。

鳳さんはそのパスをダイレクトで相手ディフェンダーの間を通す。

そこに練習生が走り込む。

ぎりぎり間に合い、ダイレクトでシュートを打つ。

シュートは勢いよくネットを揺らした。

失点直後に勝ち越した。

その後も一進一退の攻防が続いたけど、29分、スコアが動いた。

自陣で敵のパスを俺がカットし、李さんに預ける。

李さんはフリーの犬飼さんにパスを出した。

犬飼さんがドリブルで進む。途中清水さんのワンツースで相手を抜き、ペナルティーエリアの横まで行き、そこからマイナスのセンターリングを走り込んでいた俺に出す。

それをダイレクトで蹴った。

ボールは勢いよくゴールに吸い込まれた。

3 - 1 になり、試合が終わった。

試合終了後、俺は清水さんに話をしに行った。

「清水さん」

清水さんがこつちを振り返った。

「何だよ」

機嫌が悪そうだ。

「きちんと守備して下さい」

「うつせえよ」

「でも」

「興味ねえんだよ　甘ったれたテメエの子供じみたちやちな目標
なんざ知ったこつちやねえ」

いつもよりも酷い言われようだ。

清水さんが立ち上がる。

「もう俺に話し掛けるな　嫌いなんだよ　みたいな奴は」

そう吐き捨ててそのままどこかに行ってしまった。

「言うねえ、お前も」

いつの間にか後ろにいた杉本さんに声をかけられた。

「生意気に見られるから気をつけろよ？」

納得いかなかったが、とりあえず頷いておいた。

第11話練習試合対富山戦

キャンプ18日目。

今まで練習試合に出ていた川村修さんかわむらおさむが正式に契約をした。

今日のラフィカ富山との練習試合で本格的に連携を確かめるらしい。

今日は30分ハーフは変わらないけど、3本やるらしく、この前出場出来なかったマイケル達も出場するらしい。

俺は2、3本目に出場することになった。

1本目のメンバーはゴールキーパーに山下さん、センターバックに宮原さん、角田さん、ピサロ。

守備的ミッドフィルダーに李さんとブエゴ、右サイドハーフに杉本さんと左サイドハーフに野村さん。

攻撃的ミッドフィルダーに田原さん、フォワードにフラビオと天野さんが入った。

試合が始まる。

最初にチャンスを得た富山だった。

富山のセンターバックが天野さんからボールを奪い、ボールをSB

に渡す。

S Bはそのままドリブルでハーフウェイラインまで上がると、相手フォワードに縦パスを出す。

パスを受けたFWはドリブルを始める。

まずブエゴが止めに行くが、ワンタッチでかわされる。

李さんがスライディングで奪いに行くがそれもかわす。

次にピサロが止めに行く。

ピサロと相手フォワードの1VS1になる。

相手フォワードがメイア・ルア（向かってくる相手DFと身体が入れ替わるようにボールを前にちょこんと蹴りだして自分はボールとは逆側を半円を描くようにぐるっとまわって、相手をかわすプレーのこと）でピサロを抜く。

ピサロが手でユニフォームを掴む。

相手フォワードが手で振り払った。

しかしそのせいで少し態勢を崩した。

その隙について角田さんがボールを奪いに行く。

しかし相手フォワードが角田さんより早くボールに触り、股を抜く。

宮原さんが止めに行く。

宮原さんが強引にぶつかり奪おうとするが、逆に吹っ飛ばされる。

山下さんと1VS1になる。

相手フォワードが2度のキックフェイント（蹴るフリをして相手を抜くフェイントのこと）で山下さんを抜き、がら空きのゴールにボールを蹴り込む。

先制された。

「なにあれ」

「本来」2なんかにいる選手じゃないんだよ、あの人は」

俺が呟くと植森が答えた。

「誰なの？」

「前田利樹　スピード、パワー、テクニックの全て兼ね備えた日本トップクラスのフォワードだよ」

しかし試合はその後東京の一方的な試合になった。

15分、田原さんのコーナーキックからフラビオが頭で合わせ、同点ゴールを決める。

22分には天野さんのスループスにフラビオが合わせ逆転ゴール。

27分に杉本さんのクロスにフラビオが右足で合わせ、ゴールを決めた。

前田には東京のディフェンダー陣が完全マークし、ボールを全く触れさせなかった。

1本目は3 - 1で終わった。

2本目のメンバーはゴールキーパーに松本さん、センターバックに角田さんとピサロ、右サイドバックに杉本さん、左サイドバックに宮原さん。

守備的ミッドフィルダーに李さんとブエゴ、左サイドハーフに野村さん、右サイドハーフに犬飼さん。

フォワードには天野さんと俺が入った。

試合開始直後、俺に鬼のような怖い顔をした大男がマークについた。

大男は俺へのパスをことごとくカットする。

逆に天野さんをマークしてる相手ディフェンダーは天野さんをマーク出来ず天野さんがフリーでボールを受ける。

天野さんを中心に攻める。

しかし先制したのは富山だった。

李さんのパスをカットした相手左サイドバックが一気にドリブルで駆け上がり、ミドルシュートを放つ。

松本が触ったが、勢いが殺し切れずゴールに転がった。

直後に李さんが鳳さんと代わった。

しばらくはどちらもチャンスが生まれなかったが鳳さんと天野さんを中心に徐々に東京が押し始めた。

すると12分、相手のミスパスを奪った鳳さんからのロングパスを天野さんがワントラップして俺にスルーパスを出した。

俺はマークについていた大男を振り切り前に出て来たゴールキーパーにぶつかりながらゴールを決めた。

追加点が生まれたのは27分、富山のミッドフィールダーがスルーパスを出し、前田さんが受け取る。

そのままドリブルで突き進む。

鳳さん、角田さんを抜き、右隅にシュートを放つ。

しかし松本さんがぎりぎり触りシュートはバーに当たる。

こぼれ球を宮原さんが拾い、そのままドリブルで駆け上がる。

途中ブエゴ、犬飼さんとワンツで進み、ペナルティーエリアに入る。

そのままゴールキーパーをかわし、ゴールを決めた。

2本目はそのまま2 - 1で終わった。

3本目のメンバーはゴールキーパーに大西さん（プロ入りしてからまだ試合に出ていない控えゴールキーパー、と植森が言っていた）、センターバックには植森とブエゴ、右サイドバックに新垣さん、左サイドバックに犬飼さん。

守備的ミッドフィルダーに木田さんと鳳さん、攻撃的ミッドフィルダーに清水さん。

フォワードは戸塚さんとマイケルと俺が入る。

3本目は相手も控え組が先発したからか圧倒的に東京が押していた。

2分にいつも通り守備をしない清水さんがミドルシュートをバーに

当てると7分には新垣さんからのクロスをマイケルが頭で合わせた
が、これは相手ゴールキーパーにキャッチされた。

9分にもオーバーラップした犬飼さんのシュートのこぼれ球を俺が
シュートしたが、これはポストに当たる。

なかなか点が入らず、嫌な雰囲気になってきた12分、清水さんが
俺に鋭いスルーパスを出す。

何とかライン上に止めてマイケルにクロスを上げる。

マイケルが頭で合わせ東京が先制した。

さらに17分にもコーナーキックからマイケルが頭で合わせ追加点。

19分には犬飼さんに代わり入った川村さんがミドルシュート、こ
ぼれ球を俺がシュートしたけどこれはゴールポストに当たった。

そして27分。清水さんからスルーパスをもらったマイケルが相手
にペナルティーエリア内で倒されペナルティーキックをゲット。

きっちり決めて3本目は全得点マイケルが決めて3 - 0で終わった。

試合の後、今日も全く守備をしなかった清水さんに話をしようとし
たら、何処にも見当たらない。

近くにいた杉本さんに聞いてみた。

「清水さんは何処ですか？」

「清水さん？ 多分膝の治療でも受けにドクターの所に行ってるんじゃない？ 今日は何本かミドルシュート打ってたから」

よく 理解出来なかった。

「どうゆうことですか？」

杉本さんは少し言つのを躊躇ってから話し出した。

「あの人の膝 爆弾抱えてるんだよ。もう長い間の運動は出来ない。だからスルーパスで味方を動かす。守備も極力しない。それでもミドルシュートを打ちすぎたりドリブルをし過ぎるとすぐ治療しないと動きが悪くなる。しかもあの人はそのことを誰にも言わない。だから前のチームでもチームメイトや監督から誤解されたんだよ。このことチームで知ってたのは山下さん、宮原さん、俺と監督、ドクターの女池健太めいけんたさんの5人だけ。」

もう後のことは頭に入らなかった。

気がついたら走り出してた。

清水さんは宿舎のチームドクターが止まっている部屋にいた。

ドアをあけるとちょうど治療が終わったところだった。

「お、亀山 だったっけか？ どうしたかね？」

好々爺という感じのドクターの女池さんが話し掛けて来る。

清水さんが立ち上がって部屋を出ようとする。

「邪魔だ、小僧」

「すみませんでした！」

清水さんに頭を下げる。

「うるせえよ」

清水さんが部屋を出た。

「なあに、心配いらんよ」

女池さんが肩を叩いてくれた。

「お前さんが眩しすぎるのさ」

「どういふことですか？」

「仙堂高校せんどうこうこうを知ってるかね？」

「ええ、一応」

仙堂高校は広島にある強豪校で昨年の高校選手権でもベスト8になっている。

それがどういふ関係があるのだろうか？

「奴^{やつ}さん、仙堂高校を初めて全国に導いたのさ」

「え」

「今から14年前のことだがね。奴さんは14年前のインターハイで2年生ながら仙堂高校のエースとしてチームを3位に導いたのじゃ」

「そんな凄い人だったんだ」

「その次の年、キャプテンになり、インターハイ3位、高校選手権ベスト8。そのまま浦和ティグレに入団。その時お前さんと同じようなこと言っていたんじゃない」

「同じようなことって」

「『このチームを優勝させる』とな。お前さんを嫌うのも昔の自分を思いだすから　だろっ、まだプロのことを何も知らず、眩しく光ってた頃を」

「それでチームメイトから嫌われたんですか？」

俺が聞くと女池さんは首を横に振る。

「浦和は怪我してすぐに解雇されたんじゃないよ。奴さんの怪我は当時すぐに直る怪我じゃなかったから　嫌われたつてのは多分パンテーラ神戸時代じゃろう。神戸の時はほとんどの仲間が膝のことを知らなかったらしい　知ってたのはチームドクターとたまたま治療

を見た杉本だけじゃったそうじゃよ」

「そうなんですか」

それなのに　俺は　！

「気にすることはない。それに奴さんはそれを望んじゃおらん。奴さん同情されるのが嫌いなんじゃ。お前さんが出来るのは奴さんの前で全力でプレーするだけじゃ」

「え？」

「奴さんは今、分岐点に立っている」

「分岐点　？」

「このままサッカー選手としてプレーを続けるか、引退を視野に入れた選手になるのかの分岐点じゃよ。このまま現役を続けて意味があるのか　と迷っておる。じゃからお前さんはプレーで、奴さんが答えを見つける、ヒントを出してじゃよ」

「　俺が　」

「おそらくお前さんにしか出来んことじゃ。」

「　分かりました」

俺がそう言つと女池さんはフォッフォッフォッと笑った。

第12話練習試合対神戸戦

キャンプ20日目。

今日は普通に戦術練習、のハズだったのだけど――

「今日練習試合するぞ」

いきなり監督に言われた。

「神戸の相手チームがインフルエンザが蔓延してて試合出来ないらしい。だからうちに試合の話が来た」

だそうだ。

パンテーラ神戸は4年前J2降格したが、1年で復帰したJ1チームで超有名企業がスポンサーについたこともあり、代表経験者が多数所属している。

元日本代表の守備的ミッドフィールダー三沢進^{みさわすすむ}、右サイドバック水原純也^{じゅんや}、元ブラジルU-23代表左サイドバックホージェルらが所属し、今年も元日本代表のフォワードの平明^{たいらあきら}、元ブラジル代表のセンターバックにエメルソンを加えた。

おそらく今の東京より数段上の能力だ。

「ま、ウチより数段上のチームだからな。全力のメンバーで挑むぞ」

試合は富山の試合と同じく30分ハーフで3本やるらしい

1本目のメンバーはゴールキーパーに山下さん、センターバックに宮原さん、角田さん、ピサロ。

守備的ミッドフィールダーに李さんとブエゴ、右サイドバックに杉本さんと左サイドバックに野村さん。

攻撃的ミッドフィールダーに田原さん、フォワードにフラビオと天野さんが入った。

試合が始まる。

試合は神戸が一方的に押し込む展開になった。

開始直後からボールを保持され、シュートを打たれまくるが、山下さんのセーブでゴールを守り続ける。

しかし10分、ボールを受けたホージェルがドリブルで進む。

三沢さんとパスを繋ぎながら進んで来るホージェルをブエゴが倒してしまう。

自陣の真ん中辺りからフリーキックになり、キッカーの三沢さんが直接、無回転フリーキックでゴールを狙う。

直接決まり、先制される。

するとディフェンダー陣の集中力が途切れ、12分、15分と立て続けに平さんにゴールを奪われる。

18分に田原さんのフリーキックが相手ディフェンダーに当たり、こぼれ球をフラビオが押し込み、1点を返す。

その後はDF陣が集中力を取り戻し、相手の猛攻を防ぎ、1-3で終わる。

2本目のゴールキーパーに山下さん、センターバックに宮原さん、角田さん、ピサロ。

守備的ミッドフィルダーに李さんとブエゴ、右サイドハーフに杉本さん、左サイドハーフに野村さん。

攻撃的ミッドフィルダーに田原さん、フォワードに天野さんとマイケルが入る。

試合が始まった。

2本目も圧倒的に押し込まれ、こちらの攻めは単調でマイケルはマークについたエメルソンが完全に抑えられている。

天野さんはマークを外し、シュートを何本か打つが枠に行かない。

10分には角田さんのパスが相手に奪われ、パスを繋がれ最後は平

さんに決められてしまった。

さらに15分にはコーナーキックからエメルソンが頭で合わせ2点目を奪われる。

その後は神戸のシュートの嵐を山下さんが防ぎまくり0 - 2で試合を終えたが、良いところなく、善戦どころか完敗で終わった。

2本目と3本目の間、15分休憩があった。

3本目に出るためアップしてた清水さんのもとに水原さんが近付いて来た。

「まだサッカーやってたんですね、センパイ」

「」

「あんだけチーム壊しておいてまだ『王様』気取れますね」

水原さんが笑みを浮かべる。

その笑みは残忍な笑みだった。

「うるせえよ」

清水さんが水原さんから離れる。

壊したって、どういうことだろうか

「どうかしたか？」

ちょうどいい時に杉本さんが来た。

「清水さんがチームを壊したって　　どういことですか？」

「　　あの人は神戸がJ2に降格した遠因なんだよ。実際には俺のせいなんだけど　　な」

「え？」

「降格した時の春のキャンプ　　移籍して来たあの人のプレースタイルに誰もが驚いた。浦和にいた時はパサーじゃなくてドリブラーだったからな　　そして誰も守備をしるって言った。最初は口にはしなかったけど俺もそうだった。だけど　　たまたま見ちまったんだ、あの人が治療してるところを」

杉本さんが少し話すのをためらったけど、また話し出す。

「それから俺も理由を言わなかったけど庇うようになった。そのせいで　　何人かは清水さんを庇い始めた。そうしてチームはチームとして成り立たなくなった　　チームに亀裂が出来たんだよ。その年はそれでJ2降格した。それで清水さんも俺も解雇された」

「でも　　神戸の監督は清水さんが怪我してるの、知ってたんじゃないんですか？」

「知らなかったよ、全部後から聞いたんだけど　　浦和のフロントは怪我を隠してたんだ。清水さんはそのことに絶望したみたいで

神戸が早く自分を解雇してくれるように仕向けたんだと思う。それなのに　俺は　」

杉本さんは黙って下を向いてしまった。

「　なら、乗り越えましょうよ」

俺がそう言つと杉本さんが顔をあげる。

「清水さんと一緒に過去を乗り越えましょう。女池さんが言つてました。清水さんが現役続けるかどうか迷ってるって　何が原因かはわかりません。膝のことなのか年齢のことなのか　でももし神戸のことが関係してるなら　」

杉本さんは黙つたまま聞いている。

「杉本さんもそうです。過去は過去としていつまでも存在します。でも、いつまでも引きずってちゃ　駄目です」

杉本さんが全部聞き終えると俺の頭をポンと軽く叩く。

どこかすっきりした顔をしている。

「　ありがとう」

「え？」

「そんな簡単なことにも気付けないなんてどうかしてたな。俺は過去を引きずり過ぎてんだんだな　」

杉本さんがそう言うと、フィールドに向かって歩きだす。

俺もついて行く。

「女池さんがどんな言い方したか知らないけど　清水さんは多分
引退を視野に入れてる」

「え？」

女池さんはそこまでは言っていなかった。

「でも、もしこの試合で自分の可能性に気付いたら　変わるかもしれない」

「なら、勝ちましょう」

奮起させるにはもう「善戦」じゃ駄目だろう。

「そうだな、勝とう。またサッカーやりたくなるくらい、圧勝しよう」

「ハイ！」

第13話過去を乗り越えろ！

神戸との練習試合の3本目のメンバーはゴールキーパーに松本さん、センターバックが植森とブエゴ、右サイドバックに杉本さん、左サイドバックに宮原さん。

守備的ミッドフィルダーに鳳さん、右サイドハーフに天野さん、左サイドハーフに野村さん。

攻撃的ミッドフィルダーに清水さん、フォワードにマイケルと俺が入る。

試合が、始まった。

相手がセンターサークル内でボールを動かした。

すぐに後ろにパスを出す。

相手はボールをポゼッションしながら、徐々にこちらに迫って来る。

しかし、最後のところでセンターバックのブエゴ、植森が踏ん張る。

相手のセンタリングをブエゴがヘディングでクリア、そのボールを杉本さんが拾う。

杉本さんがそこからドリブルで少し進み、サイドチェンジで天野さんに渡す。

左サイドの天野さんから清水さんにボールが渡る。

清水さんが鋭いスルーパスを俺に出す。

ラインぎりぎりで止めて、左から中央に持っていく。

水原さんは戻れていない。

マイケルの方を見ると、エメルソンがぴったりとマークしている。

マイケルにパスを出すのをあきらめ、ドリブルで進む。

ペナルティーエリアに入った瞬間、戻って来た水原さんが俺の足を削る。

そのまま倒ればペナルティーエリアになるかもしれない。

だけど、自分の中の『何か』がそれをさせなかった。

踏ん張ってドリブルでしかける。

相手センターバックが右から止めに来るのが見えた。

センターバックがタックルに来る直前にシュートを放つ。

相手ゴールキーパーの右手をかすめたが、そこまでしか見えなかった。

相手のタックルに吹き飛ばされ、ゴールポストに肩をぶつけた。

激痛が肩に走った。

顔が痛みで歪んでいるかもしれない。

チームドクターがすぐに来たが俺はドクターを右手で制しボールを
探す。

ボールはゴールの中にあつた。

すぐに試合に戻りたかったが、チームドクターに止められた。

肩を回し、異常がないことを見せつけた。

試合に戻った時にはゲームの流れが一変していた。

チームを勢いづけるには、あの１点で十分だった。

試合はこちらが主導権を握っていた。

しかし、なかなか追加点がなかなか奪えず、流れが再び神戸に傾き
始めた。

その嫌な流れを断ち切ったのは、清水さんのパスだった。

相手のパスをハーフウェイラインの辺りで野村さんがカット、すぐ
に鳳さんに横パスをする。

鳳さんはオーバーラップして来た杉本さんにパス、杉本さんが再び野村さんにパスを出す。

ペナルティーエリアの横から清水さんに向けマイナスのクロスを入れる。

清水さんはそのままダイレクトでボレーシュートするかに見えた。

その予想は裏切られた。

清水さんはジャンプして、ヘディングで後ろに落とす。

そこには走り込んだ宮原さんがいた。

宮原さんがペナルティーエリアの外からシュートを放つ。

シュートはゴールキーパーの左手に弾かれ、勢いが削がれたが、ゴールの中に転がった。

2対0になる。

しかし、おそらくピッチの中で点差を気にしている人間は少ないだろう。

練習試合ではもちろん勝つ方がいいが、それより自分のプレーを監督にアピールしたり、試合勘を得るためにプレーする。

もしかしたら点差を気にしているのは俺だけかもしれない。

それでも、俺には勝たなきゃいけない理由がある。

そんな思いが周りに飛び火したのかもしれない。

そのくらい、活気づいていた。

試合が半分も過ぎた頃には完全に東京が試合を支配していた。

しかし、得点までには至らない。

そんな時、平さんのシュートがバーに当たり、跳ね返って来た球を植森がクリアした。

植森のクリアボールを清水さんが胸でトラップして鳳さんにバックパスを出す。

鳳さんが天野さんにスルーパスを出す。

天野さんがドリブルでつっかけ、クロスが入られる位置に行く。

完全に右サイドバックを抜き、クロスを入れようとする。

亀山の中の『何か』がファーサイドにボールが来ると告げた。

亀山はそれに従い、ファーサイドに行く。

俺にマークについていたセンターバックは気付いていない。

しかし、天野さんが蹴ったクロスはニアサイドのマイケルに向けら

れていた。

マイケルとエメルソンがジャンプする。

どちらかがヘディングするはずだった。

しかしボールはどちらにも当たらず、俺の前に飛んで来た。

キーパーが急いで飛び出す。

俺もボールに向かって飛び込み、ヘディングでバックパスする。

ペナルティーエリア外で待っていた清水さんがミドルシュートを決める。

3対0になる。

俺がボールを持ってハーフウェイラインに走る。

まだ時間がある。

今まで味わったことのない感覚を、いつまでも感じていたかった。

清水さんの為に、という気持ちから自分の為に、に変わっていた。

もうすぐ試合が終わる。

体がこれまで一番キレている。

ドリブルも、パスも、シュートも、全て上手くいつている。

相手ディフェンダーにプレスをかければ苦し紛れのクリアしかさせない。

完全にノっていた。

そんな時、ハーフウェイラインよりちょっと敵陣側で俺がインターセプトした。

脇から野村さんが走る。

いつもの俺ならパスを選択していたが、今はそうしなかった。

ドリブルで敵陣を進む。

相手右サイドハーフは野村さんについていった。

そのまま敵が来ないままドリブルで進む。

敵陣真ん中辺りでようやく相手との1対1になった。

相手の後ろには三沢さんがいて、例えば俺が相手を抜いてもボールが取れる位置にいた。

野村さんには相手右サイドハーフがいてパスが出せない。

その時、再び自分の『何か』が告げた。

前を向いたまま、アウトサイドで横パスを出した。

そこに清水さんが走り込んで来た。

そこからロングシュートを放つ。

シュートは綺麗にゴールに収まった。

4点目が入った。

それと同時に笛がなった。

練習試合が終わった。

試合後、三沢さんが清水さんに話しかける。

「いいチームですね」

「まあ、悪くはないな」

「辞めないで下さいよ。こんないいチーム、他にないんですから」

「」

清水さんは黙ったまま、三沢さんから離れた。

少し足を引きずっている。

監督が清水さんに声をかける。

「ナイスプレー、清水。どうだ、気持ち変わったろ？」

「はい」

ってことは

「ここでプレーするのも、悪くないです」

引退はしないってことだ。

「ナイスプレー。お前のおかげだ、亀山」

杉本さんが褒めてくれた。

「ありがとうございます！ これで、過去を乗り越えられたと言いますけど」

「過去？」

杉本さんが不思議そうな顔をする。

「いや、試合前に言ってたじゃないですか」

「ああ、あれ嘘だから」

「は？」

思わず声が裏返る。

「嘘？」

「うん、嘘」

あっけらかんと言つてのける。

「どこからですか？」

「J2降格の遠因になったところから全部。あと浦和が怪我したの黙って移籍させたつても嘘。神戸は知ってて獲得したから」

なんか脱力した。

重要な部分殆ど嘘じゃないか！

「あの人は怪我とか以前に単純にやる気なくしただけ。怪我した当初は治す方法がない、なんて言われてたけど今は手術すれば治るようになったんだよ」

「手術？」

「そう、手術。やっと受ける気になったみたい」

杉本さんが満足そうに笑っている。

「何の為に」

「お前と若い時のあの人は一緒だ。何も怖い物なんかないって感じで、やる気に満ち溢れてた。でもあの人は挫折した。だからもう一

回あの人にやる気を出させるにはあの人の中のがむしやらさを思い出させる必要があった。だからお前にがむしやらにプレーしてもらった」

本当のこと言ってもがむしやらにやったのに

「ま、悪かったな」

全く謝られてる気がしない。

「まあいいですけど」

そのおかげかどうかは分からないけど、まるで自分じゃないような感覚を味わえた。

「いつもアレがあればいいのに」

「ん？ 何か言ったか？」

「あ、いやなんでもないです」

結局あの感覚は 何だったんだろうか

第14話 フラビオの過去

神戸戦の翌日は休み、その後清水さんが手術のために渡伊。

練習はフィジカルから戦術練習へと比重が変わっていった。

その後は柏と山形と練習試合をした。

2試合共敗戦し、俺は両試合とも1ゴールずつあげたが神戸戦の感覚は味わえなかった。

今日は宮崎の地本チームと練習試合だった。

1本目はフラビオが5ゴールを決めて5 - 0の圧勝。

2本目は天野さん、俺、マイケルのゴールで3 - 0の勝利。

3本目はマイケルのハットトリックで3 - 1の勝利だった。

試合後、天野さんが「ナイスプレー」と声をかけてくれた。

天野さんのゴールは俺が出したスループスを決めたものだった。

天野さんに今まで感じた疑問を聞いてみた。

「何でフラビオは1本目しか出ないんですか？」

これまでの練習試合、フラビオは全て1本目しか出場していない。

神戸戦も1本目唯一のゴールを決めたのにも関わらず、だ。

今まで疑問だったが、清水さんの時のように騙されるのが嫌だったから言わなかったけど、気になってしょうがなかった。

「まあ色々あったみたい。俺も詳しく知らないからブエゴに聞いてみな。多分マッサージ受けてると思うよ」

天野さんはそう言ってマイケルの方に歩いていった。

天野さんの言った通り、ブエゴは女池さんにマッサージをしてもらっていた。

「お、亀山か。どうしたんじゃ？」

女池さんはブエゴにマッサージをしながら聞いた。

『ブエゴ、質問があるんだけど』

スペイン語で聞くとブエゴが驚く。

『スペイン語話せたのか？』

『少しね。友達の母親に教えてもらったんだ』

『そうか　で、質問ってなんだ？』

『何でフラビオは1本目にしか出ないんだ?』

俺が聞くとブエゴはしばらく考え込む。

『聞いてどうする?』

『フラビオはなんか辛そうにプレーにしている。サッカーはもっと楽しくやるべきだ。どんなことがあっても』

俺がそう言つと、ブエゴが笑った。

『いいよ、教えてやる。清水を変えたお前なら、フラビオも変えられるかも知れない』

ブエゴはそう言って話し始めた。

『あいつは元々がむしろにプレーをするタイプのフォワードだった。今じゃ面影もないけどな』

今のフラビオはワンタッチゴーラーと呼ばれるクロスやパスを合わせて点を取るタイプの選手だ。

『17歳の時にブラジルのクラブでトップに上がった。けどその監督はかなりの人種差別者でな。日本人の血が混ざってるというだけであいつをプレーさせなかったんだ』

『日本人?』

『ああ、あいつ日系3世だぞ。父親が日本人とブラジル人のハーフ、母親がウルグアイ人とカメルーン人のハーフなんだ』

そんなこと初耳だ。

『だからフラビオは移籍させてもらえるようチームのフロントに訴えた。だけどチームは移籍させようとはしなかった。敵として戦うのは困るからだろうな』

『それって 』

『ああ。飼い殺してやつだ。フロントの答えはいつも同じ、実力は認めてる、もう少し待て 　　ってね』

『そんなことが 』

『有り得るんだよ、実際。それから2年くらいたってからチームを辞めて日本に来たんだ』

『何で日本に?』

『クラブに国内クラブに移籍しないことを条件に出されたからな。だから今の監督を頼ってこのチームの練習生に、そこから正式に契約したんだ。加入した年はチームの得点王になったんだ。けどその年、東京は新しい外国人フォワードの獲得を計画して、フラビオを他クラブに移籍させようとした。解雇だと移籍金が発生しないからな。だけど新しい外国人フォワードが獲得に失敗した。それと同時にフラビオの残留が決まったのさ』

『そんな　人を物みたいに　』

『フラビオもそう思ったのさ。だからやる気を無くした　サッカー界に絶望したのかもな。プレースタイルが変わったのもそれから金になる仕事だけをこなすだけの選手になっちまった。だから調子を調えるためにだけに練習試合に出てるのさ』

『そんなことが　』

『プロスポーツの世界ではよくあることさ。それに、お前と会ってからちよつと変わってきてる』

ブエゴが笑う。

『え？』

『いつもは練習で手を抜くあいつがお前が入ってからあまり抜かなくなった。お前のプレーを見て昔を少し思いだしたのかもしれない　』

マッサージを終えたブエゴは立ち上がる。

『後少しだ。昔の気持ちを完全に思い出せば　このチームは劇的に変わる』

ブエゴが俺の肩を叩く。

『頼んだよ、明日の試合』

明日はこのキャンプの締め括りとも言える水戸との練習試合だ。

『あいつを　立て直してやってくれ』

フラビオの身体能力と技術に、ひたむきさが足されたらどんな選手になるのだろう。

多分俺なんか手の届く範囲にはないだろう。

それは、俺の出場機会が減る可能性があるということだ。

『分かった』

それでもそう答えたのは、フラビオの本当の力を見てみたいと思ったからだ。

第15話最後の練習試合

キャンプ最終日。

水戸コリエンテとの練習試合だ。

今日の試合は45分二本の実際の試合形式と同じように行われる。

グラウンドに行き、柄の悪そうな男が近づいて来る。

どこかで見た気がする。

「久しぶりだな、マイケル」

「片岡」

雑誌でしか見たことはなかったけど、片岡星彦だ。

高校選手権では12得点あげた諏訪には及ばず大会得点王は逃したが、11得点をあげた日大工業のエースだ。

「まだスタメンとってないんだな」

片岡が笑う。

「うるせえよ、てめえに関係ないだろうが」

マイケルがイラついているのが分かる。

「片岡！」

後ろから優しげな風貌の男が片岡を諷めた。

確か雑誌に載っていた守備的ミッドフィルダーの山口都河士だ。

「やめとけ」

「分かってるって」

片岡はそう言っただけで戻っていった。

何しに来たんだこいつ

監督から先発メンバーが発表された。

「ゴールキーパー山下、センターバックピサロ、宮原、ブエゴ」

ちよつとどよめいた。

ブエゴがセンターバックで先発するのは初めてだ。

「守備的ミッドフィルダー李、田原、右サイドハーフ杉本、左サイドハーフ野村、攻撃的ミッドフィルダー天野」

残りはFWだ。

おそらくフラビオは出てるだろうが、もう一人は誰だろうか？

「フォワードはフラビオと亀山」

俺の名前が呼ばれた。

「亀山、お前がスタメンだ」

周りがざわつく。

「聞ってるのか？」

「は、はい！」

初めて先発で出場することになった。

試合開始の時間になる。

今日の試合は一般開放されていて、普通の観客もいる。

「アガってるのか？」

杉本さんに聞かれた。

「そりゃあちよつとは」

「困るな、フラビオにサッカーの楽しさを教えてやるんだろ？
ブ
エゴから聞いた」

ブエゴの方を見るとウィンクをしてきた。

多分ブエゴが昨日の話を監督にしたんだろう。

だからスタメンで出場することになった。

「ま、気楽にな。まずお前が楽しまなきゃ意味ないしな」

肩を叩かれた。

何か重い荷が降りた気がした。

フラビオからのパスで試合が始まった。

後ろの田原さんに出すとボールがおもしろいように繋がっていった。

しかし、なかなかゴール前まで持って行けない。

李さんが無理矢理縦パスを出す。山口にインターセプトされる。

その瞬間に水戸の選手が一気に上がってくる。

山口から右サイドハーフへパス、右サイドハーフがダイレクトでサイドチェンジし、左サイドハーフがオーバーラップしてきた左サイドバックにパス、そのままドリブルで進む。

李さんが当たりに行く。

相手の左サイドバックがヒールパスで左サイドハーフにパス、左サイドハーフが中央にパス。

走り込んでいた山口が片岡にパスを出す。

片岡がディフェンダーのピサロを背負ったままボールをトラップする。

片岡はターンしてシュートを放つ。

山下さんは一歩も動けず、ボールはネットを揺らした。

水戸の選手達が片岡の周りに集まる。

山下さんがボールをとってセンターサークルに向かって投げる。

投げられたボールを受けとって再開の準備をする。

ゲームが再開される。

相変わらずパスは回るがなかなかシュートまでいけない。

守備をしないフラビオが自分のところにボールが来なくて苛立っている。

俺が少し下がり、ボールを受けようとしたら相手のセンターバックもついて来た。

田原さんがそのスペースにパスを出す。

フラビオが待つてましたと言わんばかりに走り込む。

しかし、山口がスペースを埋めるために走る。

フラビオの方がボールに先に触る。

山口がスライディングでボールを止めようとするが、フラビオが先にシュートを放つ。

相手ゴールキーパーの手をかすめ、相手ゴールに入る。

東京が同点に追い付く。

フラビオはたいして嬉しそうなそぶりを見せない。

試合が再開された後も東京ペースで試合が進む。

だがフラビオのゴール以降なかなか水戸の守備を切り崩せない。

時間だけが過ぎていく。

どれだけチェイシングをしてもボールがとれない。

フラビオは相変わらず味方のパスを待つだけだ。

前半が残り僅かになり、相手ディフェンダーがロングボールを蹴る。

ブエゴがヘディングでクリア、田原さんが拾う。

田原さんが杉本さんにパスを出し、杉本さんが俺にパスを出す。

相手のマークを外し、フリーでパスを受けた。

フラビオは相手のマークを外しきれていない。

自分でシュートを打つことを選択した。

相手の右サイドバックが真横からスライディングタックルをしてきた。

ボールを浮かせ、スライディングを避ける。

前に出て来た相手ゴールキーパーの股の間を狙って打ったが、ボールは相手GKの踵に当たり、ゴールラインを割った。

審判の笛が鳴る。

前半が終了した。

ベンチに戻る途中、フラビオに肩を掴まれる。

『なんで俺にパスを出さなかった』

俺がスペイン語を喋れることを知っているのか、それともそれを忘れていいのか、一方的に喋る。

『まだフリーになってなかっただろうが』

こっちの言葉も雑になる。

『関係ねえよ、とにかくゴールなら俺にパスを出せ』

完全なエゴイズムだ。

『お前のための試合じゃない』

『俺のための試合だ。練習試合でゴールを決めてリーグ戦でゴールを決める。それが俺の仕事だ。お前らは俺にパスを出せばいいんだよ！』

『サッカーは お前だけじゃ出来ない。サッカーをもっと楽しめ』

『楽しめ！？ サッカーは俺にとって金を稼ぐための仕事だ！ てめえみたいな楽しいサッカーなんておままごとにすぎないんだよ！』

『そんなサッカーつまんねえんだよ！ 観客に失礼だろうが！』

『ああ！？』

『それにお前はそんな気持ちでサッカー始めたんじゃないだろ！？』

俺がそう言つとフラビオは黙りこんだ。

主審がようやく止めに来る。

「何やってるんだ！」

「ちょっとしたミーティングです」

俺はそう言ってベンチに戻った。

ハーフタイム中に監督から指示が出る。

「相手は山口が攻撃のスイッチになっている。フラビオ、亀山の二人でプレスをかける、いいか」

周りの人間がどよめく。

通訳がフラビオに訳して伝える。

『わかりました』

さらに周りがどよめく。

中には信じられないといった顔をしてる人もいる。

「練習試合だから控え選手も次々入れて行くぞ、準備しておけ」

「ハイ！」

試合が再開される。

相手が山口にパスを出す。

フラビオと俺がプレスをかける。

山口は焦ったのか、らしくないミスパスを出し、フィールドの外に出た。

山口が驚いている。

スローインを杉本さんがトラップして前を向いた。

この試合、ほとんど動かなかったフラビオがサイドに動く。

相手センターバックはフラビオの動きに釣られる。

スペースが生まれた。

杉本さんがパスを出す。

山口がインターセプトを狙ったが、それより早く走り込んでいた野村さんがミドルシュートを放つ。

そのシュートはポストに当たったが、跳ね返った球が相手ゴールキーパーに当たってゴールになった。

それから試合は一方的になった。

3点目は動き回るフラビオが倒されて得たFKを田原さんが直接決

めた。

4点目は俺がフラビオとのワンツーで抜け出し、決めた。

5点目は途中出場の鳳さんのややミス気味のパスをフラビオが上手く走り込み、ゴールに蹴り込んだ。

6点目はそれまでシュートしか選択肢を持たなかったフラビオ周リを使ったり周りのためにスペースを作る動きをしたことで相手守備がフラビオ自身に甘くなったこともあり、30メートル近いドリブルからシュートを決めた。

相手の反撃を1点に押さえ、6 - 2で圧勝した。

監督が選手達に労いの声をかけている。

フラビオはブエゴと話している。

『楽しかったか？ フラビオ』

『俺のサッカーに楽しいなんてねえよ だがまあ こっちの方が楽に点が取れそうだ』

フラビオが不敵に笑う。

『やってやるよ 俺のためにな』

第16話帰還

宮崎から東京に戻る時間になった。

宿舎の人に小さなセレモニーをしてもらい、空港に出発した。

バスの中は先程の練習試合の疲れからか寝ている選手が多かった。

空港に着いて、搭乗の準備をする。

空いた時間を使って寮にいる月美さんに電話した。

「もしもし」

「あ、亀山!？」

月美さんの嬉しそうな声が聞こえる。

「今どこ？」

「宮崎の空港です」

「お、もうすぐだね!」

まだだいぶ後だけど

「沢山ご馳走作って待ってるから!　じゃあね!」

切られた。

東京に戻って来た。

クラブハウスで解散した。

マイケルのバイクはちゃんと管理されていた。

マイケルに乗せてってもらう。

寮に着くと、いい匂いが漂っていた。

「今日の夕飯は旨そうだな」

「そうだな」

俺達は急いで『食堂』に入った。

『食堂』には豪華な料理が並ぶ。

もちろん、栄養やカロリーのことも考えているメニューだ。

月美さんが楽しそうにキャンプ中の話を聞きまくる。

主に話しているのは植森だ。

俺は試合の疲れからか満腹になると眠くなってきた。

「すみません、先寝ます」

『食堂』を後にする。

部屋に入ると机の上に何か置いてあった。

お守りと手紙だった。

お守りには『必勝祈願』と書いてある。

手紙を読んでみる。

「亀山へ。キャンプお疲れ様でした。有意義なキャンプになったみたいですね。清水さんとフラビオの復活に一役買ったと兄に聞きました。兄や杉本が1年近くトライしていたんですよ？」

知らなかった

「開幕戦はアヴァランチ大阪に決まりました。練習試合で結果を出し続けている亀山ならスタメンもあるかもしれません。相手はJ2屈指のタレントを揃えるチームですが、サッカーは名前だけでするものじゃないってことを証明してください。大阪までは行けませんが、寮のTVで見えます。今日はしっかり疲れを癒して早めに寝て明日に備えてください。宮原月美」

月美さんの言葉に甘え寝ることにする。

明日の練習終了後で明々後日の開幕戦遠征メンバーが発表される。

電気を消して目を閉じた。

めずらしく月美さんに起こされる前に起きた。

昨日練習試合をしてすぐに移動したのに体がかなり軽い。

今日が試合ならいいのに、と思うくらいだ。

『食堂』にいた月美さんに手紙とお守りのお礼をしたら、照れた笑みを見せた。

練習自体は疲労も考えてか戦術の確認やセットプレーの確認程度だった。

今日の練習が終わる。

「集合！」

明後日の遠征メンバーとスターティングメンバーが発表される。

「スタメンから名前呼んでいくからな」

緊張の瞬間がやってくる。

「ゴールキーパー山下。センターバック宮原、ピサロ、角田。守備的ミッドフィールダー李、ブエゴ、右サイドハーフ杉本、左サイドハーフ野村、フォワードフラビオ、天野」

俺の名前はなかった。

「リザーブはゴールキーパー松本、ディフェンダー新垣、ミッドフィールダー鳳、犬飼、フォワード亀山、以上の16名が遠征メンバーだ」

俺も遠征メンバーに入った。

「もう知ってるだろうが開幕戦はアヴァランチ大阪だ。アウェイだが守備的に戦うつもりはない。勝ちに行くぞ！」

「はい！」

第17話開幕戦

開幕戦の朝を迎えた。

俺達の泊まったビジネスホテルは驚くほど静かで、少しの物音でも響く。

相部屋になった田原さんはまだ寝ていた。

起こさないように静かに廊下に出た。

窓の外は車が凄い勢いで行き交っている。

ホテルからアヴァランチ大阪のスタジアムが見えた。

後8時間後にはあのスタジアムでプロチームの一員として参加することになる。

希望で胸が高鳴る。

朝食を取り、ホテルを出発する準備をする。

スーツケースに荷物を入れ、閉めた。

隣の田原さんはゆっくりと準備をする。

田原さんの準備が終わった頃には出発時刻ぎりぎりになっていた。

バスに乗り込み、天野さんの隣に座る。

「遅かったな」

「俺のせいじゃないっす」

俺がそう言つと天野さんは少し笑った後黙り込んでしまふ。

バスの中の空気が重い。

だれもしゃべる人はいなくて、みな緊張しているように見える。

中には不安そうな顔をしてる人もいる。

スタジアムに着いて、ロッカールームに入る。

すぐにウェアを脱ぎ、ユニフォーム姿になる。

アップをしにフィールドに出る。

観客はまだ4、5割しかおらず、多分満員にはならないだろう。

東京ミストラルのサポーターは100人くらいだろうか。

50、000人収容出来るこのスタジアムではかなり少なく見える。

ボールを使ってアップを始める。

既にアヴァランチ大阪はアップを始めていた。

アップ中に選手紹介が行われる。

アウェイの東京の選手紹介は手短に行われる。

「ゴールキーパー、背番号1、山下洋明、ディフェンダー、背番号2、ピサロ・フェルナンデス、背番号3、角田和紀、背番号4、宮原保、ミッドフィルダー、背番号6、ブエゴ・ボカティージョ、背番号7李日晷、背番号8、杉本正一、背番号13、野村芳樹、背番号10、田原久敬、フォワード、背番号9、フラビオ・ヘルセペス、背番号11、天野浩司。リザーブ、GK背番号16、松本良明、DF背番号5、新垣正義、MF背番号17、鳳尊、背番号18、犬飼茂男、FW背番号28、亀山俊彦」

東京サポーターから拍手が起こる。

「続いて、我らがアヴァランチ大阪のスターティングメンバーの発表です！」

大阪サポーターが沸く。

ゴールキーパー、ディフェンダーと名前が呼ばれるたびに拍手と歓声が起こる。

「中盤の底からチャンスを作り出すアヴァランチのキャプテン、6番、石田穂！ 右サイドを駆ける仕事人、8番、エドル！」

エドルが大阪のサポーターの歓声に応える。

何故かフラビオがエドルを睨みつけている。

「ナンバー１０を背負うアヴァランチの若きバンディエラ、１０番、御倉井司！」

誰よりも大きい歓声がスタジアムを包み込む。

「帰って来たアヴァランチのエースストライカー、９番、宮本剛！」

大きな拍手が起こる。

宮本が手を挙げて歓声に応える。

アヴァランチ大阪サポーターの応援に熱が入る。

アップを切り上げ、ロッカールームに戻る。

それぞれがそれぞれの方法で集中する。

監督が手を叩く。

「相手はＪ２屈指のタレントが揃ってる。だが勝機はある。相手は３・５・２のフォーメーションだ。つまりサイドは一人だ。ここで優位に立てばゲームを支配出来る。野村、杉本、お前らにかかっている」

監督が野村さんと杉本さんの顔を見る。

二人とも頷く。

「守備はとにかく相手フォワードの宮本とアウダイルにフリーでボールを持たせるな。特に宮本にボールを出されると厄介だ。なるべくボールを宮本に出ないように守れ」

守備陣の顔を見ていく。

みな黙って頷く。

監督は一人一人に声をかける。

「もう一度言うが相手はJ2屈指の選手が揃ってる。だがチームとしてはウチの方が上だと俺は信じている。頼むぞ」

「ハイ！」

山下さんが監督に代わり中心に立ち、円陣を組んだ。

「今日が今シーズンの始まりだ。しっかり勝つぞ！」

「オウ！」

腹の底から声を出す。

ロッカールームのドアを開け、外に出た。

『相手の8番と知り合い？』

フラビオに聞いた。

『昔のチームメイトだ』

ブエゴから聞いた話と今のフラビオの表情から想像すると、あまり
愉快的仲間ではなさそうだ。

『今日だけは何があっても、負けられない』

フラビオの表情が血に飢えた野獣のそれへと変わる。

ピッチでは開幕のセレモニーが行われる。

それをベンチから眺める。

足が疼く。

体の中から早く試合に出たいと叫ぶ声が聞こえる気がする。

なんとか押さえてセレモニーが終わったピッチを見つめる。

試合が始まった。

第18話ミス

序盤は東京がペースを握る。

フラビオのプレスに大阪市の花である桜をイメージしたらしいピンクと紺のユニフォームを来たアヴァランチ大阪ディフェンダー陣が戸惑ったのかミスを繰り返すし、東京がチャンスを量産する。

しかし相手ゴールキーパーの神懸かり的セーブでなかなかゴールを奪えない。

徐々に相手ディフェンダーが慣れてくると相手全体が落ち着いてくる。

サイドの勝負では互角、少なくとも決定的な仕事はさせていないが、御倉井や石田が相手フォワードにパスを通す場面が増えてくる。

宮本のシュートがピサロに当たり、こぼれた球をクリア、天野さんに渡る前に石田にカットされた。

石田がエドルにパスを通す。

ワントラップしたエドルが前を向き、野村さんとの1対1に挑む。

左に抜こうとするが野村さんは読んでいた。

きちんとボールに対して足を出し奪った。

しかし、主審の笛がなり、ファールになる。

野村さんがどうしてといったような表情になるが、黙って壁に立つ。

35メートルのサイドからのFKだが、御倉井の射程距離だということは前日のミーティングに見たDVDの映像で理解している。

しかし右足で蹴るため、今回は誰かに合わせそうだ。

主審の笛が鳴り、御倉井が蹴る。

嫌な予感がした。

回転のかかった球が高い弾道で勢いよく飛んできた。

宮本が角田さんの肩に腕を乗せて跳ぶ。

宮本のヘディングシュートは山下さんの手をかすめネットを揺らした。

大阪サポーターが沸く。

東京の選手は一斉に抗議をする。

「今のはファールだろうが！」

角田さんが珍しく声を荒らげる。

いつもは無口な李さんも抗議している。

野村さんは副審に確認させようとするがおそらく副審もファールと

はとらないだろう。

1、2分してようやくボールはセンターサークルにたどり着いた。

ゲームが再開されても大阪ペースは変わらず、それどころか勢いを増す。

東京の選手は苛立ちからかプレーが雑になる。

山下さんがなんとか守っているが、いつ2点目が入ってもおかしくない。

現に1点取られてから既に5本以上シュートを打たれ、その打ち4本はフリーのシュートだ。

監督がテクニカルエリアぎりぎりまで出て指示を飛ばしているがおそらく耳には入っていない。

徐々に大阪は中盤でパスを回し始めた。

無理をせずに確実にボールをキープする。

東京の対応が後手に回り、なかなかボールが取れない。

フラストレーションばかり溜まる。

石田から御倉井へパスが通り、エドルにスルーパスが通る。

フリーで受けるとドリブルで進み、ペナルティーエリア内で角田さんの1対1になる。

エドルはシュートを打つために先程と同じく左に抜けようとするが角田さんが足を出す。

しっかりボールにいったがエドルが倒れ笛になる。

初めはエドルのシュミレーションかと思った。

しかし主審はイエローカードを角田さんに出した。

P Kとなる。

スタンドからは大阪サポーターの歓声が起こる。

角田さんが完全にキレた。

「こいつが勝手に倒れただろうが！」

山下さんや宮原さんも抗議し、主審に詰め寄るが主審は相手にしないどころか「これ以上はカードを出す」といったそぶりを見せる。

納得出来ないままP Kになる。

山下さんが大きく両腕を広げ、自分を大きく見せようとする。

キッカーは宮本だ。

大阪サポーターの宮本コールが場内を包む。

宮本が助走に入る。

右足で思いきり右下に蹴った。

山下さんの跳んだ方とは真逆に蹴られたボールはネットを揺らす。

痛恨の追加点を許してしまう。

山下さんが地面を叩く。

東京の選手達はもはや声も出ていない。

監督だけがテクニカルエリアから声を出している。

監督がベンチに戻って俺達にアップを命じる。

残り時間はまだ15分以上残っている。

試合はさながら大阪のシュート練習と化している。

主審の判定基準が微妙でなかなか思い切った守備が出来ないために相手にいいようにやられている。

さらに点差がついてもおかしくなかったが山下さんがなんとか防ぎきり、前半を0対2で折り返した。

ハーフタイムの間、リザーブの選手はピッチでアップをする。

シュート練習を松本さんに向かって行う。

きっちりと決めていく。

時間が来てロッカールームに行く。

ロッカールームを開けると、意外と声が出ていた。

修正点でも話しているのだろうか。

監督が俺を向き、ホワイトボードを指差す。

そこには俺の名前があった。

「後半、角田に代えてお前だ、準備しろ」

「ハイ！」

「気張れよ」

角田さんに頭をポンと叩かれる。

俺の出番がやって来た。

第19話真打ち登場！

再びフィールドに戻ると、既に大阪の選手は円陣を組もうとしていた。

俺以外の選手がフィールド内に入り、俺は主審に合図されて入る。

フィールド内はまるで別世界で、自分が自分じゃないみたいだ。

足が地面に根を生やしたように重く、胸がバクバクする。

緊張が体全体に及ぶ。

円陣に加わる。

「監督の言われた事、きっちり守って行くぞ」

山下さんが声を出す。

監督にはフォーメーションの変更と守備の注意、そして忠告を一つされた。

「俺達の相手は主審じゃない、アヴァランチ大阪だ。目の前の相手に勝つために全力を尽くす」

山下さんがゆっくりと復唱する。

「勝つぞ！」

「オウ！」

後半が始まる。

後半も選手交代をせずに前半の勢いそのままの大阪が攻め立てる。

東京は水戸戦と同じフォーメーションになるがなかなかボールが前に来ない。

プレスをかけても軽くないなされてしまう。

なかなかボールが奪えなかったが、李さんがボールをインターセプトした。

田原さんにパスを出す。

田原さんから俺にパスが来た。

右足でトラップした瞬間、足先から脳まで電撃がくらったような感覚があった。

さっきまで重かった足はまるで翼が生えたように軽い。

心臓はまるで稼働していないみたいに静かだ。

セメントみたいに固かった体が嘘のようだ。

神戸戦のあの感覚が戻って来た。

ドリブルで相手陣内を突き進む。

二人の相手ディフェンダーを股抜きとキックフェイントで交わし、ペナルティーエリアに入ったフラビオにパスを出す。

フラビオはフリーでボールを受けたが、戻って来た石田にボールを奪われた。

シュートを打てなかったが何か行ける気がした。

ただの気のせいかもしれないが、漠然と自信に溢れていた。

ピサロが宮本へのパスをインターセプト、前にクリアした。

相手ディフェンダーと並走する。

相手より少し早くボールに触り、ワンタッチで相手の股を抜いてやった。

相手陣内3分の2くらいの場所でゴールに向けて右サイドからドリブルを開始する。

石田が詰めて来た。

すぐに右のスペースにパスを出す。

さっき抜いた相手ディフェンダーが追いかけていたが、それより速く杉本さんがボールを受けた。

杉本さんがドリブルで誰もいないスペースを突き進みペナルティエリア横まで来た。

相手ディフェンダーがクロスを阻もうとする。

そこでペナルティエリア前にいた俺にパスを出した。

ダイレクトシュートを予想したディフェンダーがシュートコースを消しに来た。

すかさずフラビオにスループスを出す。

前に出たゴールキーパーより速くボールに触り、ゴールキーパーの股の間を狙ってシュートを打つ。

ボールはゴールの中に転がる。

フラビオはすぐにボールを持って走る。

一秒でも早く再開させなければ時間はすぐに無くなってしまふ。

センターサークルにボールを置き、再開を待つ。

再開された後は東京が勢いを取り戻したが、審判の微妙な判定もあって五分五分の試合となっていた。

どちらもチャンスを作ることとは出来ても決めきれない。

相手が中盤でパスを回し始めた。

石田から御倉井にパス、エドルにパスを出そうとした。

しかし李さんがインターセプトする。

後半にはいつてからは李さんが御倉井のプレーを完璧に防いでいる。

李さんが野村さんにパス、野村さんがすぐに天野さんにパス、天野さんから俺にスルーパスが出た。

しっかりとトラップして前を向く。

敵は相手ディフェンダーが三人とゴールキーパー、味方はフラビオ一人だ。

パスではなく、ドリブルで進むことを選んだ。

すぐにディフェンダーが詰めてくる。

右サイドをちらりと見て左に切り返すとあっさり抜けた。

フラビオが左サイドに動いてディフェンダーを引き付ける。

ディフェンダーを抜けばゴールキーパーと1対1になる。

そのままつつかけた。

相手ディフェンダーが巨大な壁に見えた。

ぎりぎりまで進んで右にパスした。

杉本さんが走っている。

後ろからは石田が走っていた。

ほとんど機能していない相手左サイドハーフの分も走っている。

しかし単純なスピードなら杉本さんの方が上だ。

石田はスライディングでボールに先に触ろうとするがその前に杉本さんが触った。

ワンツで相手ディフェンダーを抜いた。

ゴールキーパーと1対1になり、ゴールキーパーが前に出て来る。

足を大きく振り、シュートフォームに入る。

ゴールキーパーが両足に体重をかけシュートを防ごうとする。

シュートを打たずに右から抜き、無人のゴールに蹴りこんだ。

東京サポーターが歓喜の叫び声をあげる。

サポーターに向けて走ろうとしたら誰かに倒される。

杉本さんだった。

フラビオや野村さんも集まり荒い祝福を受ける。

大阪の選手がいまいましたそうに睨みつけている。

残り時間は15分だ。

同点に追い付いた勢いそのままに逆転を狙う東京が一方的に攻め立て、大阪がカウンターを狙う、という図式が成り立っている。

ボールがラインの外に出て、両チーム共選手交代する。

東京は野村さんに代わって犬飼さんを、大阪は左サイドハーフに代えて期待のルーキー、媛風理央を投入した。

御倉井が左サイドに移動、媛風がフォワードに入り3トップになる。

相手に合わせ天野さんが右サイドハーフに、杉本さんが右サイドバックに入り、犬飼さんが左サイドハーフに移る4-4-2のシステムになる。

媛風は小柄で少女のような風貌だが独特の緩急のリズムや圧倒的なテクニクを使い抜いていくストライカーだ。

媛風が投入されてから少しずつ危ないシーンも増えて来る。

媛風がハーフウェアラインからドリブルを仕掛ける。

緩急を使って天野さんを抜き、ボールの外側へ大きく踏み込み、相手の重心を傾け、逆の足のアウトサイドで外側へボールを蹴りだし

ディフェンスを抜くマシユーズフェイントで田原さんを抜く。

さらにフェイントで杉本さんを抜いた。

ペナルティーエリア侵入直前にボールを左足で跨ぎ、右足の踵でサイドにパスを出す。

予想外のパスに誰も反応出来ない。

御倉井だけが反応し、フリーでクロスをあげた。

宮本の頭に当たる前に山下さんがパンチングでかろうじて防ぐ。

媛風 능력의 一片をかいま見る。

大阪は御倉井、媛風、宮本の3人を中心に切れ味鋭いカウンターを食らわせてくるが、ディフェンスラインと山下さんが必死に守る。

カウンターの恐怖からロングボールが増える。

ディフェンダーとの競り合いは身長的には俺やフラビオには不利だが、俺の今日の調子いい身体はなんとか競り勝っているし、フラビオは持ち前の身体能力で簡単に競り勝っている。

どちらかがボールを落とし、キープしてサイドにパス、もしくはドリブルで進むのが攻撃のパターンだがなかなかゴールに繋がらない。

第4の審判がロスタイムをボードで知らせる。

残り3分の焦りからかプレーが雑になる。

ロスタイムが残り僅かになったとき、フラビオのパスがエドルにインターセプトされ、相手のカウンターが始まる。

急いで一直線に戻る。

媛風にパスが来ると予想した。

エドルがハーフウエアラインの手前から一気に御倉井にサイドチェンジ、御倉井がダイレクトで俺の予想通り媛風にパスを出した。

ペナルティーエリア前で1対1を迎えた。

媛風を前にすると172センチしかないのに大きく見えた。

媛風が右足でボールを跨ぐ。

左に抜くつもりか、そう思って左に体重をかけようとした。

しかし、体内から「違う」と囁く声がした。

体をニュートラルな状態に戻す。

媛風は左足も跨ぐ。

ただのシザースではなくダブルシザースだった。

媛風が右にボールを出す。

左に体重がかかってなかったから右足を出してボールを奪えた。

一気にギアをあげる。

カウンターのカウンターだ。

前がかりになっていた大阪の選手が戻る。

敵ドルと御倉井は東京のペナルティーエリア内に、石田は東京陣内にいた。

敵は4人、味方は左に犬飼さんとフラビオ、右には杉本さん。

一気にドリブルで進む。

敵ボランチを股抜きで交わし、敵ディフェンダー一人をキックフェイントで交わした。

相手ディフェンダーがシュートコースを消しに走る。

すかさずフリーだった犬飼さんにパス、犬飼さんがトラップしてドリブルを始める。

クロスが入ると予想してペナルティーエリア内に向けて走る。

しかし、犬飼さんがクロスを上げる直前、後ろから足が出て来た。

エドルがもうここまで戻って来ていた。

エドルの足はボールに当たり、ゴールラインを割った。

頼むからゴールキックなんて言わないでくれよ、と祈ると主審の笛が鳴った。

エドルが主審に呼ばれ、赤いカードが出された。

エドルのプレーが危険なプレー、と取られたのだ。

今度は大阪が抗議をする番だった。

エドルや石田、宮本までが講義する。

しかし前半の東京がそうだったように主審は間違いを認めず、抗議していた石田にイエローカードを出した。

場内はブーイングの嵐だ。

大阪の選手がセットプレーの守備につく。

ボールはファールのあったゴールのやや左側にセットされる。

相手は全員戻り、こっちは宮原さんだけ残り後は上がっている。

壁は4枚、間にフラビオが入ろうとしたが押し出される。

俺は壁の横に立つ。

キッカーは田原さんと天野さんだ。

主審が笛を吹く。

田原さんが助走を始める。

壁役の選手がジャンプする。

しかし田原さんはそのままボールを跨いで走る。

天野さんが蹴った。

見事なトリックプレーだったがボールはポストに当たる。

しかし、ただ一人ボールに向かう者がいた。

田原さんだ。

プロ生活16年の元日本代表はFWのような嗅覚でボールがこぼれる事を予想したのか、フリーでシュートを打った。

しかしシュートをキーバーが右手で弾いた。

その瞬間、誰もが引き分けだと思っただろう。

だが弾いたボールは詰めていた俺に当たった。

ボールがゴールの中に転がる。

副審がゴールを認めハーフウェイライン向けて走る。

主審もゴールを認めた。

スタジアムは沈黙、東京サポーターだけが歓喜する。

杉本さん達に掴まる前にサポーター達のいる方に走る。

大阪の選手は倒れたまま起き上がることが出来ない。

後輩ロスタイム、逆転した。

試合はそのままタイムアップ、東京が3 - 2で大阪を下した。

90分間戦った選手が握手を交わす。

スタンドからブーイングが飛ぶ。

審判と大阪の選手、両方に対するブーイングだろう。

媛風と握手を交わす。

「ウチのドリブル止められたの、久しぶりや。しかも2点取られるなんて、参ったわホンマ」

「まぐれだよ、運が良かっただけ」

「謙虚やなあ。もっと目立たんとしてすぐ蹴落とされるで、元U - 17代表のマイケルも控えてるんやからな」

「ああ」

敵である媛風にかなり心配されている。

「ほな、ウチ戻らんと監督に怒られるわ。次は負けへんよ」

媛風はそう言って手を振ってチームメイトのいた方に向かっていった。

ロッカールーム前には退場したエドルがいた。

『何しに来た？』

フラビオが聞く。

『悪かったな、前は。強かったよ、お前』

フラビオがニツと笑う。

『当たり前だろ？ 今更気付いたのか』

エドルが高笑いする。

『お前がいたら、ブラジルで優勝出来たかもな』

エドルがそう言って去っていった。

『昔、あの男と何かあったのか？』

ロッカールームに入ってから聞いた。

俺の問いにフラビオは頷いた。

『前のチームの監督は日本人、アフリカ人、ウルグアイ人、ブラジル人の血が混ざった俺を嫌ってあいつを使ったのさ。あいつはポジション変わってただけだな』

フラビオは優しげな表情になる。

『結果さえ残せば使ってもらえると思ってプレースタイルを変えた。でも余計結果でなくなっただけだな』

『それで』

フラビオがチームプレーを放棄したのは周りが認めなかったからだ。『

でも、今日の試合で分かった。俺には今のやり方が合ってる』

『フラビオ』

『今年昇格してJ1優勝してアジアを制する。そうすればクラブワールドカップに出れる。あの監督を見返せる』

フラビオがまたニヤリと笑う。

『手伝うよ』

手を差し出す。

『ありがとう』

フラビオが手を握った。

第20話卒業式

開幕戦の四日後、駒坂高校の卒業式が行われた。

一ヶ月半ぶりの校舎はかなり新鮮だった。

教室に入ると同級生に囲まれた。

「ちょっと亀山、凄いじゃん！」

誰かに肩を叩かれる。

机の上にはスポーツ新聞が置いてある。

開幕戦の試合は昇格候補の大阪が劇的な逆転負けをくらった試合だったからか深夜のスポーツニュースやスポーツ新聞で取り上げられた。

2点取った俺のことも書かれていた。

「大活躍だったんだね」

今まで話した事のないような人まで話し掛けて来る。

「たまたまだよ」

「よ、有名人」

山原が新聞を持ってこちらに来た。

「久しぶり、山原」

山原から新聞をひったくって東京ミストラルの記事を読む。

俺のコメントが載っていた。

『全得点に絡んだ亀山「体のキレが最高でしたし、味方がうまく走ってくれました」』

こんな事言ってたなんて忘れてた。

必死にあの日のことを思い出す。

――まずは2得点、おめでとうございます。

「ありがとうございます」

――チームも勝利しました。亀山選手が入ってから流れが変わりましたが何か意識したことは

「別に何も　流れが変わったのは監督のおかげです、多分」

――交代の際、どんな指示を受けましたか？

「特別な指示はなにも　ただ俺達の相手は主審じゃないとは言われませんでした」

――それは誤審にめげるなと？

「多分そうだと思いますけど。前半はみんなかなりイラついてたんで」

――前半の失点は微妙な判定からのセットプレーからでした。

「前半出てないので 誤審かどうかは分かりません」

――最後のFKも誤審に見えましたが

「犬飼さんに聞いて下さい」

――2点取ったことで今後注目されるのでは？

「でしょうね、今インタビューされてますから」

――フラビオ選手のゴールを演出しましたが自分で打とうとは思いませんでしたか？

「ゴールが見えなかったので、フラビオを信じました」

――自身1点目は見事なドリブルから2点目は泥臭いゴールでしたが、どちらを評価してもらいたいですか？

「2点目はね 当たっただけですから。もっと気持ち良く逆転したかったって言うのが正直な気持ちです。でもどちらもゴールですからどちらも評価してもらいたいです」

新聞に載っていたコメントを言った覚えがない。

必死に思い出していると、姫花流が話しかけてきた。

「おめでと、俊！」

「ありがとう」

「つてかメンバーに入っただけならちゃんと言いなさいよ！」

「姫めっちゃ応援してたからね」

「見に来てたの？」

「試合に出るかどうかわからないのに大阪まで行くわけないじゃん、テレビだよ」

出るかどうかわからないのに試合見てたのか、こいつら。

「サッカー部のみんなで小山先生の家で見てたんだよ」

「小山先生お前の試合見るためわざわざJ2の試合見れるようにしたんだってさ」

「マジで？」

「ちゃんと期待に応えなさいよ」

「ああ」

ガラツと教室の扉が開く。

卒業式が始まる。

卒業式は校長やなんか偉い人の長い話や卒業証書授与が行われた。

卒業式を終え、何人も泣いている中、高校生活最後の終業チャイムが鳴る。

最後に姫花流と山原と一緒に歩いて帰る約束をしていた。

帰ろうとしたらクラスメイトに色紙を渡され、連絡先を教えたりと色々と話をした。

山原と姫花流を見失ってしまった。

とりあえず玄関に行くとサッカー部の後輩達が待っていた。

寄せ書きしたボールを貰う。

後輩達と別れ、玄関を出ると山原と姫花流が既に待っていた。

「おっそいよ！」

「知名度が急激にあがったね」

「こんなにアドレスが増えるとは思わなかった」

苦笑いするしかない。

「携帯持ってないよね」

「うん」

「意味ないじゃん！」

「あ」

「気付くの遅っ！」

「ってか買おうよ携帯くらい」

「お金が」

「プロなのに？ 契約金とかないの？」

「それは野球だろ サッカーは支度金つつうんだよ。野球より安いしな」

「へー」

「で、お金ないの？」

姫花流に聞かれた。

「あるよ、携帯買っくらいなら。でも無駄遣いしたくないだけ」

「無駄って」

「サッカー選手はあんまり稼げないからね、どうせ亀山年俸安いだろうし」

山原が言う。

「うるせえ」

「早く稼げるようになって一人立ちしてね」

「してるわ!」

姫花流と山原が笑った。

「やっぱり変わらないね、俊」

姫花流がいきなりそんなことを言い出した。

「なんで？」

「プロになって遠くにいる人みたいになっちゃったと思ってたけどいつもの俊だよ」

姫花流が微笑む。

「当たり前だろ、遠くになんか行かない、ずっとここにいますよ」

姫花流に微笑み返してやった。

「俊　ありがとう！」

姫花流が笑う。

「愛の告白？」

山原が茶化す。

「ちょ、山原！」

「そ、そんなんじゃねーよ！」

二人で同時に否定した。

「素直になればいいのに」

「うつさい！」

山原はそう言った瞬間に姫花流に腹を蹴られた。

「ぐふぉー！」

「あんたは一言余計なの！」

「じゃ最初のは余計じゃないんだ」

山原はそう言って蹴られないように逃げる。

「待ちなさい！」

「待つかー！ 暴力姫！」

「あんたのせいでしょー！」

こいつらも変わることはないんだろう。

いつまでも馬鹿なこと言ったり、からかいあったりして、たまには喧嘩して、最後には仲直りして歳とって行くんだろう。

そんなこと考えながら走っている二人を追い掛けた。

第21話平凡な休日？（前書き）

今回の話は途中から亀山目線から月美目線に変わります。

第21話平凡な休日？

試合終了のホイッスルになる。

今日の仙台戦は前半、伊達のパスからフォワードのバロンと守備的ミッドフィルダーの加藤孝かとうたかしに決められ、2点ビハインドを背負ったが、後半から出場した俺のスルーパスからフラビオが決めて1点返し、後半ロスタイムに相手のパスをインターセプトした杉本さんがサイドチェンジ、途中出場した川村さんが一気にドリブルで進んでセントリングを俺がヘディングシュート、相手ゴールキーパーの弾いたボールをフラビオが押し込んで2-2の同点で試合を終えた。

開幕戦からすでに6試合を終え、東京ミストラルは5勝1分けで全勝の湘南に続き2位に位置している。

俺自身も開幕戦から全ての試合に途中出場、大阪戦と仙台戦は後半開始と同時に投入され、152分間出場して2得点2アシストを決めた。

だが、リザーブ外のマイケルもサテライトでゴールを量産してアピールしている。

マスコミは「各ポジションの厳しいスタメン争いが今の順位に繋がっている」と報道する。

ゴールキーパーは山下さんがスタメンだがリザーブの松本さんが出場の機会を虎視眈々と窺っていて、ディフェンダーにはレギュラーの3人に加え新垣さんと植森が鎬を削り、守備的ミッドフィルダー、攻撃的ミッドフィルダーには現在のレギュラーのリザーブには鳳さ

んがいるうえ守備的ミッドフィルダーは新垣さんが、攻撃的ミッドフィルダーは天野さんがプレー可能、サイドハーフには右は杉本さん、左には野村さんがレギュラーだが犬飼さん、川村さんが控え、フォワードにはフラビオ、天野さん、俺、マイケルがレギュラーを争っている。

バスがクラブハウスに到着、試合後はいつもそこから天野さんの車に送ってもらっている。

ほぼ同時期にマイケルと植森と俺で教習所に通い始めたが、時間のない俺が一番免許取得に時間がかかりそうで、しばらくは天野さんのお世話になりそうだ。

寮に着くと月美さんが待っていた。

「お帰りなさい！ もう、勝たなきゃ駄目だよ！」

「無理言わんといてよ」

天野さんは相手が誰だろうとタメ口だ。

「李しか帰って来てないけど、他の二人は？」

今日の試合は俺、天野さん、杉本さん、李さんが試合に出て松本さんがリザーブだった。

「知らないけど、恋人のところじゃない？」

「そっか ご飯どうしよう?。」

「多分大丈夫でしょ」

月美さんと天野さんが会話を続ける。

俺は自分の部屋に戻った。

部屋に戻るとベットのの上に投げであつたんだかんだで購入した携帯のランプが光っている。

携帯を持ち上げ、ディスプレイを見ると姫花流からのメールだった。

姫花流は毎試合終わると叱咤激励メールをくれるが、ありがたいけど正直イラつとすることもある。

今回も試合での課題をいちいち書いてある。

メールを見終えた携帯を机に置きベットに横になった。

部屋の窓から太陽の光が入って来る

いつの間にか寝ていたみたいだ。

何故か腹部に重みを感じた。

目を開くと月美さんの顔がアップで目の前にあつた。

「~~~~ツ！」

悲鳴にならない悲鳴が俺の口から発せられた。

「何やってんですか！」

「何って 夜ばい？」

「もう夜じゃないし！ ってかどいて下さい！」

「え〜いいじゃん」

「いいわけないでしょうが！」

「だって亀山ぬくぬくだもん」

そう言いながら月美さんが布団の中に入って来た。

「ちょっと！ 出て下さい！」

「やだ」

月美さんが見た目よりもはるかに強い力で腕を掴む。

「離して下さい！」

「やだ」

月美さんが腕を掴んだまま俺の耳元まで顔を近づけて来た。

「ダメ？」

その表情にドキッとするとする。

「ダメって言うか」

その時、酒の匂いがした。

「月美さん　酔ってます？」

「フフン」

返事になってねえよ、と心の中でツツコミを入れる。

「亀山、いる？」

ドアの外から植森の声がした。

「おじゃまします」

「バカ、入るな！」

俺の制止は一步遅く、植森がドアを開けてしまった。

「おじゃましました」

植森がドアを閉めようとする。

「違う、誤解だ！」

「で、こうなつたと」

その後なんとかベットから抜け出して、植森に訳を話した。

月美さんは俺のベットでぐっすり寝ている。

「鍵くらい閉めておけばいいのに」

「え、俺のせい!？」

「冗談だよ　黙つてると可愛いのにね、この人」

植森が月美さんの顔を覗き込みぺたぺた触ったりいじったりしている。

「いいのかよ、そんなこと言って」

「どうせわかんないんだからべつにいいでしょ。」

「お兄ちゃん」

植森がびくつとしたが、月美さんはすやすや寝ていて目を覚ます様子はない。

「なんだ　寝言か　びつくりした」

「びくびくするぐらいなら最初から言つなよ」

「お兄ちゃんって宮原さんのことだよな」

「この人も宮原さんだけどね」

俺も月美さんの顔を覗き込む。

確かに寝顔は可愛い。

「結婚とかしないのかな 適齢期過ぎるのに あ、柔らかい」

植森が頬を突きながら急にそんな話を始めた。

「そういうこと言うのやめとけ」

「事実だろ？ この人もう26だし」

「なんで知ってるんだよ」

「初めてここに来た時天野さんが言ってた。あとブラコンだって。でも本人に言うのと殴られるから気をつけてね」

「そんなことわざわざ言わないよ」

さらに植森が月美さんの顔をいじっていたが、寝返りをうつてしまったからかやめた。

「で、何しに来たんだよ」

「ああ、教習所行かない？」

「行こうと思つてたけど これじゃいけないでしょ」

「置き手紙とかしとけば大丈夫でしょ、行こうよ」

「うーん 分かった」

――ここからは月美視点です――

目を開けると、自分の部屋ではない部屋にいた。

頭がガンガンする。

昨日飲み過ぎたかな

起き上がって机を見ると亀山からの置き手紙があった。

いつの間にか亀山の部屋にいたみたい。

後で謝らなきゃな

隣に亀山がいたから、あんな懐かしい夢を見たのかな？

懐かしい夢

お兄ちゃんとの初めての思い出

「もう一回 見られるかな」

ずっと見てたい夢。

でもそれは夢でしかなくて。

いつかは現実に引き戻される。

それでも――

「もう一回寝よ」

その夢に縋り付くしか、私には方法がなかった。

第22話草津戦前夜

「走れ！ サボるな！ 足を止めるな！」

フィールドの外から監督の声が聞こえて来る。

個人名を出さないから誰のことを言っているのか、そもそも全員に言っているのか個人に言っているのかどうかさえわからない。

今日のミニゲームは相手も味方もサブ組が中心で、前節の甲府戦にスタメン出場した11人はミニゲームに参加せずにリカバーに専念している。

ゴールデンウィークの連戦で、スタメンはもちろん、俺も含めた控え組でさえも疲労している。

俺は開幕から全試合途中出場していて、4-4の打ち合いとなった甲府戦で1点決めたが、他の試合はノーゴールだ。

この甲府戦も含めて東京は仙台に引き分け、湘南に敗れた後、2戦連続引き分けと不調だ。

甲府戦後、草津戦はスタメン組の疲労を考え控え組と数人入れ替えると監督がマスコミに対して発言したため、控え組の選手のモチベーションは高い。

今日の練習後に草津戦の遠征メンバーを発表することになっているが、昨日試合をしたばかりだから今日の練習しだいで遠征メンバーが決まる。

従って今日の練習に熱が入る。

試合は11対11で行われ、足りないところは練習生やユースの選手をいれて補っている。

天野さんの弟の淳敏やユースのエースストライカーでU-17代表の藤代真等ふじしろまことがプレーしている。

ファールぎりぎりのプレーをしてくる相手にもしつかり対応出来ているあたりは自分との経験の差を見せ付けられている感じがする。

監督が吹いた笛の音でミニゲームが終わり、草津戦の遠征メンバーが発表になる。

「明後日の草津戦の遠征メンバーを発表する」

この時はいつも緊張する。

「ゴールキーパー、山下、松本。ディフェンダー、宮原、天野淳敏、ミッドフィルダー、李、ブエゴ、野村、杉本、田原、鳳、犬飼、川村、フォワード、フラビオ、天野浩司、亀山、マイケル。」

マイケルとユース所属の淳敏が呼ばれた。

周りも驚いているが、呼ばれた本人である淳敏が一番驚いているようだ。

「すでに学校の子承は得てる。だいぶ難色示していたがな。まあ以上のメンバーが遠征メンバーだ。スターティングメンバーは草津に

行ってから発表する」

練習終了後、寮に帰り、月美さんの作った晩飯を食べて自分の部屋に戻った。

食事中、いつも元気な植森がすこし元気なさげに見えたのは今回の遠征メンバーに漏れたからだろう。

今回はピサロが累積で出場停止だった上に角田さん、新垣さんも選ばれなかったのに植森でなく淳敏が選ばれた。

かなりショックのはずだ。

本当ならフォローしてやるべきかも知れないが、今回は自分のことで頭がいっぱいだ。

練習終了後、監督に呼ばれ、こんなことを聞かれた。

「草津戦、左サイドハーフ、出来るか？」

「出来ます、やらせて下さい」

もちろん嘘だ、一回もやったことなんかないし出来る気がしない。

しかし出来ると答えた以上、左サイドハーフで出番が来るだろう。

まずったな

草津に着き、軽目の練習を終え、スタメン発表になる。

「ゴールキーパー、山下。右サイドバック、川村、センターバック、ブエゴ、天野淳敏、左サイドバック、犬飼。右サイドハーフ、杉本、守備的ミッドフィルダー、鳳、李、左サイドハーフ、亀山。フォワード、フラビオ、天野浩司。リザーブは松本、宮原、野村、田原、マイケル」

まさか初スタメンが左サイドハーフになってしまふなんて
大変なことになってしまった

とりあえず野村さんに左サイドハーフについて聞くことにした。

ホテルで夕食を食べた後、野村さんの部屋に入れてもらった。

「左サイドハーフのやり方？」

「はい、どうやってやるのになって」

「前日に聞くことじゃないだろ」

「すみません」

「まっレクチャーしてやる。耳かっぱじって聞いとけよ」

「はい」

「サイドハーフとフォワードの違いはサイドハーフの方がプレッシャーを受けにくいってことと位置が低いってことだ。だからフォワードよりボールを保持しやすく、攻撃の組み立てもしやすい。けど位置が低いからドリブルで進む距離が長い。後は守備面での負担が大きいな。基本的には1対1だし。ま、後はなんとかなるだろ」

「分かりました。ありがとうございました」

俺が部屋から出ようとすると、野村さんが呼び止めた。

「一つ忘れてた ポジションはどこであってもサッカーはサッカーだから。お前の持ち味を出さなきゃ意味ないからな」

俺の 持ち味

「ま、お前に出来る事をやれ」

「はい、分かりました」

自分の部屋に戻った。

部屋では淳敏とマイケルがサッカーゲームをしている。

一試合終わったらしく、マイケルが誘ってきたが断った。

明日は二人共初のJリーグの試合になるのに緊張のかけらもない。

「なあマイケル」

「なんだよ」

マイケルがテレビ画面を向いたまま答える。

もう一度試合をするらしい。

「俺の持ち味って何？」

マイケルはゲームを止め、考え始めた。

「持ち味って言っても テクニクは並だし、足はまあまあだし、
フィジカルは弱いし、身長も並だし、頭も良くないし、顔も 」

「最後の関係ないだろ」

「まあ、あれだな。スタミナと諦めない心だろ」

「スタミナと諦めない心 」

それを生かすことが、明日、やるべきこと

やることが決まった。

第23話初スタメン

草津戦当日を迎えた。

朝起きてすぐにいつもありがたいがちょっとイラつとさせるメールをくれる姫花流に今日の試合はスタメンだとメールで伝えた。

スタジアムは満員になりそうな雰囲気があるでない。

試合前最後のミーティングが始まる。

「相手は4 - 4 - 2のフォーメーションだがサイドの選手がほとんどオーバーラップして攻撃に絡んでくるのが特徴だ。特にネリーノと郭友邦カク・ウバンの両サイドバックはサイドハーフをどんどん追い越して来る。この二人からのクロスをもラリスが合わせるのが一番得点が多い」

マイケルと犬飼さんがピクつと反応した。

「センターバックの二人はモラリスをきっちりケアしろ」

通訳がブエゴに訳すとブエゴが大きく頷いた。

「淳敏もな。ブエゴと息を合わせろ。お前なら出来る」

「分かりました」

淳敏の声はしっかりしている。

」初出場の重圧は苦にならないみたいだ。

「サイドハーフとサイドバックは引かずにインターセプトして裏を狙え。ボランチはサイドバックのケア。とにかくサイドの攻防で負けるな」

監督から注意が言い渡され、同時に今日の俺の仕事も言い渡される。サイドで相手のボールを奪い、カウンターの急先鋒を担うのが今日の俺の仕事だ。

きちんとその仕事をこなしながら自分の特徴を出す

難しいだろうが、やらなきゃならない。

上手くいけば自分のプレーの幅が広がる、とポジティブに考えることにした。

マイケルを見ると珍しく何かを考えている。

「どうした？ 珍しく考え込んでるな」

「珍しくだけ余計だぜ 久しぶりにモラリスに会って思ってたな」

「知り合い？」

「高校の先輩」

こいつは高校の先輩を呼び捨てにしてんのか

「そうなんですか？　どんな選手ですか？」

淳敏が食いついた。

今日のマッチアップの相手である選手を調べようとしているようだ。

「これぞセンターフォワードって感じの人だったぜ。１９０センチくらい身長あるし、ヘディングは強いぜ。でも足は並でテクニクもブラジル人にしては並だったぜ」

いつの間にかブエゴも通訳を通して聞いていた。

「でもフリーならどこからでもシュート打って来るぜ。まあ、だからってラインを不用意にあげるともう一人のフォワードが走って来るぜ」

マイケルのレクチャーは続く。

犬飼さんに肩を叩かれた。

「フォワードのこと聞いてもしょうがないでしょ」

犬飼さんが笑いながら言う。

「お前はサイドハーフとサイドバックのことを知らなきゃだよ」

「知ってるんですか？」

「右サイドバックは俺の大学の先輩だからね」

「そうなんですか？　ってか日本育ちの外人が多くないですか？」

「全員そうだよ。左サイドバックは名古屋ユースから加入した選手だし」

「そうなんですか」

犬飼さんが頷き、相手の右サイドの話をする。

「相手の右サイドバックの郭友邦は1対1やヘディングの競り合いに強いよ。相手の左サイドハーフの大槻敬太はスピードが抜群だよ。たまに二人で攻め上がるからその裏が狙い目だよ」

「そこからクロスを入れる」

「でもやみくもに入れてもセンターバックの藤本降平や守備的ミッドフィルダーの秋葉正あきはただしにクリアされるよ。相手のゲームメイカーの後藤にボールが渡ると一気に前線まで運ばれるし、きちんと味方に合わせなきゃだよ。練習の時みたいに上げとけば大丈夫だよ」

前日、前々日の練習でセンタリング練習をしていて、その時はかなり上手くいていた。

試合開始5分前、ロッカールームを出て、初めて入場の準備をした。今まではベンチだったからいつも一足先にベンチにいた。

本職ではないポジションを無事こなすことが出来るだろうかという不安と新しいポジションでの期待が入り交じる。

主審の合図で入場が始まった。

東京サポーターはアウェー席の隅にいる。

スタンドは隙間が目立つ。

記念撮影を終え、円陣を組み、キックオフとなる。

相手の右サイドハーフの選手が目に入る。

相手のキックオフで試合が始まった。

第24話草津戦前半

草津はボールを持つと一気に攻めてくる。

相手がこの試合1本目のシュートを放つのに1分もかからなかった。試合は草津ペースで進むが、ゴールキーパーの山下さんを中心に守備陣が耐える。

即興に見える4バックの布陣もかなり安定していて、シュートを打たせることは少ないが、なかなかボールが保持出来ない。

しばらくしてブエゴのクリアが俺の前に落ちた。

ボールを拾い、ドリブルでサイドを駆け上がる。

サイドハーフの大槻と1対1になる。

ワンツーパースで大槻を抜こうと守備的ミッドフィルダーの鳳さんに横パスを出した。

が、大槻はぴつたりと俺について来て鳳さんがパスを出せず、鳳さんは前線にロングパスを出す。味方に合わずにゴールキックになる。

大槻をなんとかしなければ今日の試合で活躍出来そうにない。

杉本さんのセンタリングを秋葉がヘディングでクリア、後藤にボールが渡り、前線にロングパスを出す。

モラリスが頭で落とし、相手フォワードがシュートを放つ。

山下さんがかるうじて手に当ててコーナーキックになる。

エリア内に人が集まり、一人一人がマークにつく。

俺は大槻のマークについた。

キッカーの後藤が蹴ったボールは大槻に向かっていった。

競り合いは大槻に軍配があがり、ヘディングで合わせられた。

大槻のシュートはバーに当たったが、跳ね返った球をモラリスに押し込まれた。

俺のせいで先制点を与えてしまったが、落ち込んでいる暇はない。

すぐに切り替えて、同点を狙う。

するとすぐに鳳さんが俺にパスをくれた。

再び大槻と1対1になる。

今度はパスではなく、ドリブルを選択すし、大槻の左側、サイドラインぎりぎりで抜けた。

しかし、すぐに大槻が追い付いて来た。

足の速さより判断が速いプレイヤーだ。

前からは郭が詰めて来る。

天野さんはまだゴールが狙えそうにないところにいるし、フラビオはマークを外しきれていない。

一つの賭けに出た。

ゴールの方に向き、ドリブルする。

大槻が後ろから追い縋る。

郭も足をボールの方に出す。

その瞬間にボールを左の誰もいないスペースに出す。

全速力で犬飼さんが走って来た。

犬飼さんがダイレクトでセンタリングを上げた。

精度は悪かったが、フラビオがヘディングで合わせ、ボールはゴール左隅に収まった。

1 - 1、失点直後に同点にした。

フラビオの周りで歓喜の輪が出来る。

犬飼さんに頭を叩かれた。

犬飼さんに賭け、見事に成功した。

さっきの失点のミスは取り返せた。

試合が再開される。

同点に追い付かれた草津の反撃が始まった。

相手の両サイドの選手を中心に攻めて来るからどうしても、サイドで守る時間が長くなってしまう。

なんとかインターセプトしようとしても、相手が速過ぎて自由にさせないだけでいっぱいいっぱいだ。

たまにボールをもってもフォワードが下がり過ぎていい攻めに繋がらない。

何とか失点せずに前半が終わったが、すでに敗戦ムードがただよっていた。

ロッカールームに戻り、監督が後半の指示を出す。

「1-1か まあ悪くはない。劣勢だが相手は必ずどこかで息切れを起こす。必ず足が止まる時間帯がある。そこをつけ。そして決して引くな。今日のメンバーは攻撃的に行くことを前提にしたメンバーだ。全員が前への意識を持て」

全員への指示は終わる。

監督はその後、個別に話し始めた。

俺にも声をかけて来た。

「俺が今日、お前に何を求めているか分かるか？」

「サイドを走り回って、どんなボールでも諦めないでしごとく自分の物にすること です」

俺の持ち味であるスタミナと諦めない心をサイドハーフでいかすならそれしかない。

「正解だ。相手の右サイドを蹂躪しろ、相手をかきまわせ」

監督がニヤリと笑う。

「はい、わかりました」

第25話草津戦決着

後半が始まった。

相手は開始直後から勝ち越しを狙って一気に攻めて来る。

東京はひたすら耐える戦いを強いられる。

相手右サイドバックのネリーノが天野さんからボールを奪つ。

ボールを持った瞬間、ネリーノが一気にスピードを上げ、右サイドを駆け上がる

杉本さんを抜き、サイドチェンジをしてくる。

大槻と俺が同時に走り出すが、振り切られた。

大槻がフリーでセンタリングを上げる。

モリスと淳敏が競り合い、淳敏が競り勝って、草津のコーナーキックになる。

先制点の時と同じように後藤がボールをセットする。

鋭いボールがエリア内に入る。

淳敏とモリスが競り合い、モリスがヘディングでシュートした。シュートは山下さんが弾いたが、犬飼さんのマークを外した郭が弾

いたボールを右足のボレーを決められた。

2 - 1、ついに草津に勝ち越される。

東京は失点直後に川村さんに代えて田原さんを投入する。

右サイドバックに李さんが、攻撃的ミッドフィールダーに田原さんが入る。

中盤を菱形にして攻撃に移る。

草津は1点をリードしたことでプレーが消極的になって、さっきまでとは真逆の展開になる。

李さんが強引にボールを奪い、右サイドを駆け上がる。

李さんのロングボールをフラビオが受け取り、フェイントを入れて相手ディフェンダーを抜いた。

ゴールキーパーの小島と1対1のチャンスになったが、シュートは小島に右手一本で防がれた。

こぼれ球はクリアされたが、クリアボールを杉本さんが拾い、センタリングを上げる。

ボールはフラビオの頭をかすめ、ゴールラインを割った。

チャンスを作り出してはいるが決め切れない。

後藤から大槻にパスが出た。

今日何度も見た光景が、再び繰り返される。

大槻がドリブルしてくる瞬間、第4の審判が電光ボードを持って、野村さんと共にベンチから出て来るのが見えた。

交代するのは俺ではないか？

大槻がつっかけて来た。

俺の左側、サイドラインぎりぎりから突破しようとする。

ファウルはもちろん、ラインを割ればゲームが中断し、交代になる。

それでも、せめて大槻がコントロールミスしてボールをラインの外にこぼすように、足を出した。

すると、ボールは俺の足におさまり、大槻はボールにつんのめった。

前に広大なスペースが出来た。

一気にドリブルで駆け上がるが大槻が追いつかれる。

伸ばした大槻の足が、俺の足に引っ掛かった。

倒れかけたが、なんとか堪えた。

ボールをすぐに拾い、一気に走る。

前から郭が詰めて来た。

郭を抜けばペナルティーエリア内に入れるが、奪われるとカウンタ―になる。

エリア内にはフラビオと天野さんがいた。

フラビオに向けてセンタリングを上げた。

草津ディフェンダーに競り勝ってフラビオがヘディングシュートを狙ったが小島が横っ飛びで弾く。

そのこぼれ球はライン上を転がっている。

そのままならコーナーキックになるところだ。

普通ならそのままにしておくだろう。

だけど、この時の俺は違った。

ボールめがけて走った。

郭も大槻もついてこれない。

ほとんど角度のないところからシュートを打つ。

シュートは小島の脇を抜け、ゴールポストに当たってゴールの中に入った。

2 - 2、同点になる。

ネットに絡まったボールを持って走る。

走ってる途中、主審が交代を告げた。

野村さんに代わってピッチを去るのは俺ではなく、淳敏だった。

李さんがセンターバックに入り、杉本さんがサイドバックに、野村さんが右サイドハーフの位置に入る。

一試合の間どころどころポジションが変わるのは東京の特徴だ。

同点に追い付いたことで逆転へのムードが高まり、サポーターの応援も熱が入る。

イケイケムードに水を差すものは何もない。

しかし、なかなか逆転弾は生まれない。

試合の残り時間が5分を過ぎたところで天野さんに代えてマイケルを投入した。

自然とマイケルにボールが集まる。

マイケルは何度も自分で仕掛けるが、相手ディフェンダーにことごとく読まれる。

第4の審判が電光ボードを出す。

ロスタイムは2分だ。

ブエゴがヘディングでクリアしたボールを李さんが拾い、俺にパスする。

おそらくこの試合最後になるであろう大槻との1対1に挑む。

大槻の右から抜きにかかるが、大槻がしっかりついて来る。

一度止まってから中に入って行く。

タイミングを外すされた大槻が一か八か、足を出してボールを奪いに来る。

その瞬間、大槻の左側にボールを出してドリブルを始める。

完璧に抜いたが大槻は再び追いかける。

前には郭が待ち構えている。

犬飼さんが後ろからカバーに走ってくれる。

大槻はスピードを落とし、俺のマークを捨て犬飼さんをマークするようだ。

郭は俺との間を詰めないところを見ると、まだセンタリングはないと思っっているようだ。

向きを変え、センタリングを入れようとすると、右側から大槻にボールを奪われた。

大槻は犬飼さんのマークについたわけではなかった。

ボールは郭の方に転がって行く。

そのままダイレクトでクリアしようと右足を振り上げる。

考えるより先に、体はクリアされそうなボールに向けて走っていた。

郭の蹴ったボールは俺に当たり、大きく跳ね返った。

無我夢中にボールを追いかける。

後ろから来た大槻より先にボールをキープする。

大槻がレッドカード覚悟でスライディングをしかけてくる。

スライディングをかわさず、犬飼さんにパスを出す。

審判はアドバンテージをとる。

犬飼さんがセントリングを上げた。

ボールは相手ディフェンダーに当たり、転がる。

立ち上がってボールを追いかける。

才能のない俺が認められた、ボールへの執着心。

これだけは、譲れなかった。

大槻がユニフォームを掴んで来たが片手で振り払った。

マイケルに向けてセンタリングを上げる。

相手ディフェンダーに競り勝ち、走り込んできた田原さんに落とされた。

ダイレクトシュートはゴール右隅に決まった。

ネットが勢いよく揺れる。

3 - 2、ついにこの試合初めてリードした。

そして直後に試合終了の笛が鳴る。

仙台に引き分けてから続いていた未勝利記録を止め、久々の勝ち点3を手に入れた。

第26話選考合宿

6月、本来なら梅雨の時期だが空はからっと晴れている。

今日の試合はいつもの試合とは違う。

いつもの緑のシャツと黒のパンツではなく、青のシャツと白のシャツ――日本代表のユニフォームを着てロッカールームにいる。

何故代表のユニフォームを着ているのか、それはU-18代表に選ばれ、日本協会が主催する大会に挑もうとしてるからだ。

ちょうど2週間前、Jリーグが代表戦のからみで中断した。

東京は草津に3-2で勝った後、直後の熊本戦では引き分けたが、その後3連勝で中断期間を迎えた。

リーグ中断直後、チームに日本協会から一本の電話があつた。

俺とマイケル、ユース所属の藤代がU-18代表候補に選ばれた、という内容だった。

急いで荷物をまとめ、翌日、選手選考が行われる合宿場に新幹線で移動した。

ここで最後の選考を行い、JFAユースカップという大会に出場する18名を選ぶことになる。

今回は66名と異例の大人数が代表候補に選ばれたため、俺がどの位置にいるか全くわからない。

合宿場の最寄りの駅に着くと、J2で戦った媛風や大槻がいた。

「あんさんも選ばれたんやな、こりゃ手強そうや」

「今回はきちんとフォワード登録だな」

草津戦以降、スタメンは1度もなかったが、途中出場で左サイドハーフとしても起用されるようになった。

ただ、今回の招集ではフォワードと呼ばれている。

「まあ、俺としてはお前とポジション争いたくないし、構わないんだけどね」

大槻がそう言っただけで宿舎のドアを開けると、ロビーに関東から来た選手は、ほぼ全員集まっていた。

どうやら関東圏の選手では俺、マイケル、大槻の3人が最後みたいだ。

ロビーで一旦別れた。

そこには水戸の片岡や山口、高校選手権で戦った鹿島の諏訪、そして懐かしい男がもう一人いた。

「山原、お前も選ばれたんだな」

山原はJFLのTAKADA・S・Cで1年目から左サイドバックのレギュラーを勝ち取った。

「姫に聞かなかったか？」

「何も言っ てなかったけど。雑誌を送ってくれただけだし」

「亀山にしか眼中にないしな、姫は」

山原が苦笑いをする。

「何バカなこと言っ てんだよ」

「気付いてるくせに。いつまでもごまかせないよ、自分も他人も」

山原がそう言っ た時、再びドアが開く。

飛行機で来た選手達がやって来たらしい。

20人以上の選手達が入っ て来た。

そして、コーチの田坂昌彦たさかまさひこさんが手を叩き、口を開いた。

「諸君、代表候補選出おめでとう。君達は今、代表の座に手をかけている。ここからはい上がるのは君達自身だ。健闘を祈る」

その後、これからについて説明された。

今日は監督はイタリアに視察をしに行っ たらしく不在で、今は不在

の本格的な練習は天気が悪く、飛行機が飛ばなかった九州、沖縄の選手達が参加する明日から行われるらしい。

今日は皆のスピードやスタミナなどを計るらしい。

早速着替えて、計測を行うことになった。

計測が終わると、その日の練習は終わり、自由時間となる。

自由時間といっても、合宿場の中はとくにこれといって珍しい物はなく、結果、初めて出会った人達と部屋に居続けることになるのかも知れない。

部屋割りが発表された。

俺は広島イーリスのサイドハーフの木村篤也きむらあつや、東京シュトルツの攻撃的ミッドフィルダー宝田佳剛たからだけいこと相部屋になる。

「久しぶりだなあ、亀山あ。同じ部屋だなあ」

「そうだな」

宝田が俺の肩を叩く。

1年生の時は東新のゲームメイカーとしてプレーした宝田は去年、駒坂との試合で決勝点を呼び込んだFKを蹴った奴だ。

かなり人懐っこく、試合終了後、いきなり話しかけてきた記憶があ

る。

木村篤也とは会ったことはないが、17歳で広島ユースからプロ契約したことや今年、J1復帰した広島のスーパースタブとして活躍していることはニュースで知っている。

目が合ったが、すぐに視線をそらされた。

部屋に入ると、二人は荷物を置いて部屋から出て行った。

俺は姫花流から送られて来た雑誌を読むことにした。

姫花流が付箋を貼ったページを開くと、ひさながみつる久永充監督のインタビューが載っていた。

――今回は66名と異例の大人数の選手を招集しましたが？

「今回呼んだ選手はJFAユース大会だけじゃなく、10月のU-18W杯予選にも起用して行く予定です。そのため、今現在、自分の日本代表の構想にある選手全員を呼びました」

――ということとは、今回の合宿で選抜された18名で予選を戦う、ということですか？

「怪我やスランプ等もありますが、おそらくそうなるでしょう。勿論、亀山や前田のように、なんらかのきっかけで急成長する選手もいるでしょうから、そういった選手達も考慮しますが」

俺の名前が出て来た。

姫花流はそれを知っててこの雑誌をくれたのかも知れない。

再び雑誌を読む。

――今回、高校生が6名選出されていますが、この意図は？

「私の構想に入っている選手です。もちろん、JFAユースカップのメンバーに選ぶ可能性もあります」

――海外所属の選手を招集したのも、同じ理由でしょうか？

「はい。日本にいる選手と異なり、生で見る機会が非常に限られて来るので、海外にいる選手には、こういう場で力を発揮して欲しいです」

まだインタビューは続いていたが、とりあえず雑誌を閉じた。

海外から来る選手、がいるらしい。

ドアが開く音がして、山原が入って来た。

「ノックぐらいしろよ」

「お前しかいないって宝田言ってたけど」

「お前らの部屋にいるのか？」

「諏訪の所に来たみたいだったけど。覚えてるだろ、諏訪」

「忘れるわけないだろ」

「あいつ殆ど話さないから間がもたないんだよ」

「二人しかいないのか？」

「ああ、竹ノ内っていう選手が明日イタリアから来るらしいけどな」

「外国から　か。他にどんな選手が来てる？」

「姫が渡した雑誌に書いてあると思うけど」

そう言つて山原は俺の脇にあつた雑誌を手にとつて開く。

「ほら、ここ」

山原が指差したページに、代表候補の一覧が会つた。

「ゴールキーパーに2人、ディフェンダーに3人、だな」

「フォワードはいないのか」

ホツとした。

「でも、だからといって簡単なわけじゃないからね。フォワードの
得点力不足は日本の課題だけど、良いフォワードがいらないわけじゃ
ないんだから」

「そんなことわかつてるさ」

「
どうだか
」

山原はそう言っ
て雑誌を投げた。

第27話 サバイバル

二日目になった。

朝食を取ると、実戦形式の練習を朝から夕方まで行っ、とコーチの田坂さんが言っていた。

どうやら合宿最終日の五日目までずっと実戦形式の練習らしい。

監督やまだいない選手は今日の練習前にはここに到着するらしい。

早速、練習のチームが発表された。

俺が入ったCチームは俺の他に宝田、山口、山原、そしてラフィカ富山所属の前田さんがいる。

「お、よろしくな、亀山」

前田さんが背中をバシバシ叩く。

「あ、はい 前田さん、18歳なんですか？」

「おお、早生まれだから学年はお前らより上だけだな。だから去年からプロにいたんだよ」

前田さんは去年、日本屈指の強豪、大阪レオーネに加入したが試合に出れず、当時J2の下のリージュであるJFLからJ2入りを目指していたラフィカ富山に期限付きで移籍するレンタル移籍で加入、半年の契約だったが期限を延長して今年も富山のエースとして、現

在J2の日本人得点王という人らしい（雑誌に書いてあった）。

「しかし、このチームはマジで強いな、わたるだいき渡大輝ときむらゆついち木村優一がいるし」

「誰ですか、その二人？」

「渡は大阪レオーネ所属のセンターバック。具体的な特徴としては、長身を生かした高い打点のヘディングと足の速さを活かした1対1の強さが売りな。木村は広島イーリス所属のセンターバック。広島はパスを繋ぐスタイルチームだから、それを成し遂げるために木村も攻撃の起点となるビルドアップやフィードを最終ラインから出すのが得意な選手だ。ちなみにお前と同部屋の木村篤也の兄貴な。二人とも早生まれだからプロ2年目、二人ともJ1のチームでスタメンだ」

日本代表が揃うような2チームで試合に出続けるのは凄いこのだと思っ。

「そのうえ守備的ミッドフィルダーに山口と宝田がいる」

「宝田は攻撃的ミッドフィルダーじゃないんですか？」

宝田は高校では攻撃的ミッドフィルダーだった。

「いや、このチームに攻撃的ミッドフィルダーなんてないし知らないのか？ このチームは4-4-2のフラット型だから、守備的ミッドフィルダーが二人いるんだ。まあ、守備が得意な選手と攻撃が得意な選手のコンビを組ませるから、攻撃的ミッドフィルダーじゃないけどセントラルミッドフィルダー—いわゆるボランチと言えるけどな。山口と宝田のコンビは多分その中でも最高のコンビ

だろ。ゴールキーパー次第だけど、守備はまあ大丈夫だろ。攻撃は俺達がいるしな」

「いや、俺なんてそんな　たいしたことないです」

「一人ではたいしたことなくても、二人合わさることで実力以上の物が出せるもんだ。ツートップは戦術に奥行を持たせるために違うタイプのFWを組ませる　俺とお前、二人で一つってことだ。頼むぜ？　俺の良さを引き出してくれよ」

「分かりました」

自信はないけど、やるしかない。

監督が他の選手達と共にやって来た。

一番目立っていたのは、身長が2メートル程の男だった。

顔も外国人のような顔をしている。

「あの大きい人、誰ですか？」

前田さんに聞いてみたが、首を傾げられた。

「あんな選手Jリーグにはいないから、海外の選手だとは思っけだな」

田坂さんが選手達を集合させた。

ひさながみつる
久永充監督は37歳と現役でもおかしくない若い監督で、近所のお兄さん、といった印象をうける。

選手としては大成出来ず、20歳の時に監督の資格の勉強をし始め、23歳でライセンスを獲得した後スペインに渡り、コーチング、監督業を学んで、スペインの3部のチームの監督に就任、そのチームを僅か3年で1部に昇格させた立役者として日本サッカー界に復帰した異例の経歴を持つ監督だ。

監督は他に二人、ゴールキーパーいのうえひできコーチの増田幸三ますだしんぞうさんとフィジカルコーチ兼ドクターとして井上秀樹さんを海外に連れて行っていた。

増田さんは現役時代からコーチライセンスを取得していた経験豊富なゴールキーパーいのうえひできコーチで、日本代表のコーチを勤めていた時期もある。

井上さんは久永監督のスペイン3部にいた頃の同僚で、久永監督がU-18代表監督になる際の際の条件としてフィジカルコーチとして迎え入れさせた医者いのうえひできの資格も持っているコーチで、今回U-18代表に参加するため勤めていた病院を辞めた。

以上、姫花流が送ってくれた雑誌より引用。

久永監督が初めて口を開いた。

「皆さん、遠路はるばるご苦労様。監督の久永です。いきなり試合でびっくりしたかも知れませんが、私は試合以外の内容を全く気にしません。試合でどれだけ輝けるか、自分の良さを引き出すか、それが重要だと考えています。合宿の間の紅白戦で君達の全てを見

せて下さい」

短い言葉だったが、それだけで場が引き締まる。

アップを終えると、早速紅白戦が始まった。

俺達Cチームは2試合目だ。

目の前で行われている試合をぼんやりと眺めていると、さっき監督の後ろにいた大男が話しかけて来た。

「亀山サンですネ、僕、竹ノ内^{たけのうち}ジュリアと言いまス」

外国の訛りがある、独特な喋り方をする男だ。

この男が山原と同じ部屋になった、外国から来た選手の一人なのだろう。

「同ジチーム、ヨロシクお願いシマス」

「あ、はい。頑張りましょう」

竹ノ内さんが微笑みながら右手を差し出し、握手する。

俺達の順番が回って来た。

相手は媛風がいるDチームだ。

媛風がボールを下げる。

プレスシャーをかけに行くと相手のボランチは慌てて左サイドにパスを出す。

パスは加速した大槻に奪われ、一気にサイドを駆け上がり、相手サイドバックを抜いてフリーでセンタリングを上げる。

前田さんが相手ディフェンダーと競り合い、俺に落とす。

胸でトラップしてからシュートを放ったが、ボールは相手ゴールキーパーの正面だった。

綺麗なカウンターでチャンスを作った。

今度はDチームの攻撃だ。

3本の縦パスを繋いで媛風にボールが渡る。

媛風が得意のフェイントでディフェンダーをかわしてペナルティエリアに侵入する。

ゴールキーパーの竹ノ内さんが前に出ると、媛風はループシュートを放つ。

竹ノ内さんが素早くジャンプし、長い腕を伸ばして左手で触り、ボールの勢いを削ぐとフォロースに入った山原がクリアした。

媛風が天を仰ぐ。

竹ノ内さんの実力を垣間見た瞬間だ。

フィールドプレイヤーと違い、ゴールキーパーの場合、長身であれば絶対的に有利だ。

もちろん小柄なゴールキーパーもないわけではないが、それは少数派だろう。

竹ノ内さんが蹴ったボールをキックフェイントで対面した相手サイドハーフを振り切った木村篤也に渡り、柔らかなファーストタッチからボールをコントロールし、ライン際をドリブルする。

相手ボランチが止めに来るが、僅かなコースを見つけ、センタリングを上げる。

相手にマークされたまま、ボールを胸トラップし、後ろに落とす。

走りこんで来た宝田がミドルシュートを放ったが、ゴールポストに阻まれた。

跳ね返ったボールを追い掛け、ペナルティーエリアの外で拾う。

俺の持ち味の諦めの悪いしぶといプレーだ。

そこからミドルシュートを放つことも出来たが、前田さんがマークを外したのが見えた。

直感的に、前田さんの近くにシュート気味のボールを蹴る。

相手ゴールキーパーはシュートだと思い、ボールの行き先を読んで動いた。

その瞬間、前田さんが頭でシュートの方向をゴールキーパーの動いた逆側に変えた。

予想外のところに飛んだボールにキーパーは反応することが出来ず、ネットが揺れ、Ｃチームが先制する。

前田さんがその場で人差し指を立てるゴールパフォーマンスをする。

Jリーグでも全く同じパフォーマンスをしている。

紅白戦である今はすぐにやめて自陣に戻って来る。

試合はすぐに再開された。

媛風がボールを持つと、ドリブルで仕掛けて来る。

その独特の緩急のリズムを生かしたドリブルで独走する。

宝田を抜いて、木村優一さんとの1対1になる。

トップスピードからやや減速し、そのまま足裏でボールを一瞬止めるような動作を見せ、相手のスピードが緩んだところを一気に加速するロコモティブというフエイントで優一さんを抜きにかかるが、優一さんはバランスを崩さず、媛風のドリブルを止めた。

媛風からボールを奪い、速くて正確なフィードを右サイドの大槻に渡す。

確かに前田さんの言う通り、優一さんはフィードが上手かったが、媛風を止めたディフェンス面も凄い。

流石にJ1のプレイヤーだけのことはあると思った。

ゲームはCチームが1点リードのまま進む。

相手のフォワードが媛風に出したが、渡さんがインターセプトする。

渡さんは守備範囲が広く、媛風へのパスを殆ど通していない。

また、身体能力が高く、右サイドバックを任せただけあって足も速い。

そしてその身体能力は守りだけでなく攻めでも生きる。

宝田から篤也へ、そして俺へとパスが通り、シュートを放ったが、相手ディフェンダーに当たり、コーナーキックに変わる。

キッカーは宝田だ。

高校時代もセットプレーのキッカーを任されていた。

セットプレーに限らず、全体的にプレーの精度が高水準にある選手で、前線に張る選手、背後から飛び出す選手を問わず、絶妙のタイミングで正確無比なパスを飛ばせる。

宝田が右足で蹴ったボールはニアサイドに飛んで行く。

ニアサイドにいた渡さんが相手と競り合い、頭を捻るようにヘディングシュートを放ち、ゴール前に張っていた選手のジャンプした頭上をすり抜け、左ポストに当たってゴールに吸い込まれた。

俺達が追加点を奪った。

渡さんは空中戦の強さで攻めでも活躍出来る選手のようなだ。

勝負を決める追加点は宝田が起点となった。

フォワードを凌駕するほど得点能力を持ち、常に得点を狙う宝田の動きに惑わされ、サイドへの意識が薄かった。

それを宝田は見逃さず、左サイドハーフの篤也にパス、篤也が俺に向けてクロスを上げた。

直接狙うことも出来たが、確実にゴールを奪うため、ボレーで折り返した。

前田さんが待っていましたと言わんばかりの強烈な右足ボレーを放った。

俺がシュートを打つと思っていた相手キーパーは反応さえ出来なかった。

この試合は俺達が3 - 0で勝利し、後のチームメイトとなる選手達に驚かされていた。

第27話 サバイバル（後書き）

今回は、

1 点目、2009年第16節山形対浦和 高原直泰選手

2 点目、2004年1stステージ第14節広島対新潟 安英学選手

3 点目、2006年第4節京都対広島 林丈統選手

のゴールを参考にしました

第28話 合宿最終日

合宿も最終日を迎えた。

今日の練習試合は諏訪と同じDチームになった。

挨拶をしたが、そっけない対応をされた。

今日のチームにはゴールキーパーにトルエノ京都のレギュラーを奪い取った野々村智治、センターバックにアヴァランチ大阪のレギュラーの名田尋斗、熊本シヤランジュレギュラーの蒲田未来、サイドバックに札幌リユミエールでスーパースブとして活躍する五月雨大河、右サイドバックにJ1の大阪レオーネのレギュラーである三原^{みはら}信一^{しんいち}さん、ボランチに水原夢人と加藤孝さんがいる。

よく考えると、初回と同じ位の若手オールスターみたいなチームだ。

高校選手権優勝校の東新からプロ入りし、開幕からレギュラーで試合に出続ける野々村、U-15ロシア代表候補に選出された経験を持つ名田、日大工業でキャプテンを勤め、高校選手権で日大旋風を巻き起こした蒲田、元U-17代表の五月雨、全くの無名の存在から各ポジションに日本代表が揃う大阪レオーネで右サイドバックのレギュラーまでの上がった三原さん、鳥栖で既にチームの中心となり、ゲームメイクを任せれる水原、現在J2でアシスト数が1番多い加藤さん、そして元U-17代表のエースで高校選手権の最多得点記録を塗り替えて、鹿島という数多くのタイトルを持つ名門チームに加入し、スーパースブとして活躍する諏訪。

自分だけ場違いな気がしてしまう。

「おい、ボーっとしてんな」

蒲田に頭を叩かれた。

相手は優一さん、渡さん、山口、大槻、片岡、前田さんがいるEチームだ。

相手ボールで始まる。

山口まで下げられたボールは、左サイドの選手の足元に出された。

こちらの右サイドハーフを抜いてセントリングを上げたが、蒲田がマークしていた前田さんに競り勝ち、ヘディングでクリアした。

蒲田は190センチの体格と高い身体能力を兼ね揃えた当たり負けないディフェンスが持ち味の対人に強くマンマーカーとして優秀なストッパーだ。

こぼれ球は名田が拾い、そのままドリブルで進む。

名田はポジションニングが良く、カバーリングに優れたセンターバックでスピードもあり、攻撃時には、どんどん前を攻め上がりチャンスを演出する攻撃的なセンターバックだ。

名田がドリブルで進み、加藤さんにパスを出し、加藤さんが相手を背負いながらボールをキープし、右サイドに展開する。

加藤さんはボールキープが巧みで、長短正確なパスを散らすゲームメイカーだが、運動量も豊富で、攻守において貢献度が高い選手だ。右サイドハーフの選手はトラップミスしたが、右サイドバックの三原さんが拾い、ドリブルで進む。

三原さんは状況を瞬時に判断し、より効果的なプレーを選択できるクレバーな選手で、本職はボランチだが、適応力が高く、守備的なポジションはどこでもこなすことができるユーティリティプレイヤーだ。

三原さんがセンタリングは優一さんにクリアされたが、前線に上がった水原が利き足の左足でボレーシュートを放つ。

攻撃のイマジネーションに溢れ、技術も高い水原は前線に飛び出すプレーが持ち味。

初回の山口、宝田と違って加藤さんも水原も攻撃的なボランチだが、加藤さんが上がれば水原が下がり、水原が上がれば加藤さん下がるという役割が来ている。

シュートはキーパーに阻まれたが、チャンスを作った。

とはいえ、俺が関わっていないところでチャンスを作られるのはマズい。

ボールが片岡に渡る。

インターセプトを狙った名田のマークを外し、野々村と1対1になる。

ペナルティーエリア内に入り、至近距離からシュートを放ったが、野々村が見事にキャッチする。

野々村は相変わらずGKとしての要求される能力がバランスよく備え、安定したパフォーマンスを見せる。

野々村が前線にパントキックをする。

野々村のパントキックは精度、威力共にあり、その威力は相手陣のペナルティーエリア付近まで達する程だ。

ボールは諏訪に渡った。

山口と優一さんが諏訪を止めに来た。

諏訪は得意のフェイントで山口をかわすと、そのままミドルシュートを放つ。

キーパーの手をかすめ、ゴールネットを揺らす。

こちらのチームが先制したが、また俺が絡んでいないゴールだ。

今日までの紅白戦で俺はゴールどころかまだ1アシストしかしていない。

流石に焦って来る。

相手は山口を中心に攻めて来る。

相変わらずシュートは神懸かり的に下手だが、それ以外のプレーは神懸かり的に上手い。

前田さんは守備のプレイヤーと言ったが、攻撃でも十分貢献出来る。大槻がボールを持って、五月雨との1対1に挑むが、五月雨に奪われる。

五月雨は守備に回った時のポジショニングも上手く、1対1にも強い。

こちらのチャンスだ。

五月雨が一気にオーバーラップし、相手のサイドバックを抜く。

渡さんがセンタリングを上げられないように距離を詰めるが、かわしてミドルシュートを放つ。

五月雨はセンタリングの精度に課題があるもののドリブル突破能力、左右両足から打てるミドルシュートが武器だ。

シュートはゴールネットに突き刺さった。

追加点を奪った。

俺はまたしても得点に絡むことが出来なかった。

相手は前田さんを蒲田がマークについて仕事をさせていないからかなかなかいい攻めがない。

水原や三原さんが名田のフォローをするため、片岡に渡るボールは少ない。

残り時間も少なくなった時、またしても五月雨からチャンスを作る。サイドでボールを奪うと一気にサイドを駆け上がる。

ハーフラインを越え、そのまま自分の前のスペースにスループスを俺に出した。

渡さんと並走し、わずかに早く反応出来たが、渡さんにユニフォームを掴まれた。

倒れかけたが、このチャンスを逃すわけにはいかないという気持ちで俺に力を与える。

追い続ける渡さんを振りほどきながらペナルティーエリアに入る。

その分ゴールまでの角度は無くなったが、フリーになった。

あえてゴールから離れるようにドリブルすると相手ゴールキーパーが前に出た。

少しボールを浮かし、ボールと一緒にシュートを予測し倒れこんだ相手ゴールキーパーを飛び越える。

浮かせたボールをそのままシュートした。

ボールはクリアしようと伸ばした優一さんの足をかすめ、無人のゴールに転がった。

ついに俺が得点を上げた。

試合はそのまま3 - 0で終えた。

合宿が終わり、JFAユースカップのメンバーが発表される。

「ポジション順に呼んで行きますが、キャプテンだけ最後に呼びます。では、呼ばれた人は前に出て来て下さい」

監督がついに選考結果を告げる。

「ゴールキーパー、竹ノ内ジュリア、野々村智治。ディフェンダー、蒲田未来、木村優一、五月雨大河、名田尋斗、三原信一、渡大輝」

サイドバックの山原は入っていなかった。

「ミッドフィールダー、大槻敬太、加藤孝、木村篤也、宝田佳剛、水原夢人、山口都河士」

いよいよフォワードの番だ。

「フォワード、諏訪大輔、マイケル・仁・ジェームス、前田利樹」

マイケルも代表入りした。

残るは一枠だ。

「キャプテン、亀山俊彦」

俺の名前が呼ばれた。

と言っか――

「俺がキャプテン、ですか？」

「はい。高校選手権でもやっていたでしょう？」

「あれは――」

あれはインターハイの後、俺と山原以外の3年生全員が引退したからだ。

「では、試合前にユニフォームを渡しますので――よろしくお願いしますね」

また大変なことになりそうだ。

第28話 合宿最終日（後書き）

今回のゴールは

3点目

2009年第9節横浜対川崎 坂田大輔選手
のゴールを参考にしました。

アズーリの脅威

そついうわけで、今俺は腕に似合わないキャプテンマークを巻き、日本代表の青いユニフォームを着て試合に望もうとしている。

日本は韓国やメキシコといった国を倒し、決勝戦まで駒を進めた。

決勝戦の相手は強豪イタリアだ。

イタリアはワールドカップでウルグアイ、ドイツ、ブラジル、アルゼンチンと並んで、複数回優勝を経験しているチームで、W杯出場回数、優勝回数はブラジルに次ぐ成績だ。

伝統としてカテナチオと呼ばれる守備戦術を持ち、その守備力は世界最堅を誇り、昔から多くの優秀なディフェンダー、ゴールキーパーを輩出、攻撃的な選手ではいわゆるファンタジスタと呼ばれるスター選手を多く輩出している。

そしてその強さはA代表だけでなく、ユースにも言える。

ゴールキーパーのジノ・ヴェルデはミランの正ゴールキーパー、センターバックのアントニオ・ジェンティーレはユベントスのレギュラー。

キャプテンマークを巻くミケーレ・ファルコーニはミランの右サイドバックのレギュラーだが代表ではボランチの位置に、右サイドハーフのマッシモ・ロッシ、フォワードのマルコ・バレージはパルマのゲームメイカーとファンタジスタのコンビだ。

他にもパルマのリザーブセンターバックのファビオ・タツキナルデ
イ、インテルのリザーブサイドバックのクラウディオ・アレッシオ、
ミランのスーパーサブサルバトーレ・ストラーロら豪華なメンバー
だ。

他にも日本の、ましてや2部リーグのリザーブでしかない俺にとつ
て、世界最高峰のイタリア・セリエAにという想像も出来ないよう
な世界で練習を積んでいる連中ばかりだ。

試合前の独特の緊張感がロツカールームの雰囲気重くする。

今日のスタメンでイタリアと戦った経験どころか、欧州の国と戦っ
たことがあるのは渡さんと宝田しかない。

そもそも俺、前田さん、大槻さん、竹ノ内さんは初めての代表選出
だから当たり前なのだが。

今日のスタメンはゴールキーパー竹ノ内さん、センターバック優一
さん、渡さん、右サイドバック三原さん、左サイドバック五月雨、
ボランチ山口、宝田、右サイドハーフ大槻さん、左サイドハーフ篤
也、フォワード前田さん、俺とここまでの試合と変わらないメンバ
ーとなっている。

「イタリアのカテナチオを破るのは容易ではありません。しかし、
不可能でもありません。イタリアの4バックはスピードある選手を
苦手としています。スピードと日本の良さであるパスで相手を翻弄
して下さい」

簡単に言ってくれるがそう簡単な話ではない。

「相手の攻撃はマルコ次第で大きく変わります。そのマルコを含めて、イタリアはスロースターターです。序盤から一気に攻めて行きましょう」

イタリアは8の力のある国には9の力を出す、3の力しか持たない相手には4の力しか出さない国だ。

特にこのチームは攻撃の鍵となるマルコが本調子になるまで時間がかかる。

3しか力がないと思っていた日本に先制点を奪われれば、イタリアは慌てるだろう。

もちろん、強豪のイタリア相手に序盤から猛攻をしかけるのは容易なことではないが、この監督に言われると出来るような気がするから不思議だ。

これがカリスマ性というやつなのかも知れない。

イタリアの選手達と並ぶと、唯一身長175センチと俺とさほど変わらず、女性的な顔立ちのマルコだけは同年代と思えるが、顔立ちも体の大きさも、同じ年代の人とは到底思えない。

どいつもこいつも緊張などかけらもしていなさそうだ。

U-18代表の試合のためか日程のためか、決勝戦にも関わらずスタジアムは半分程度の入りだ。

ピッチに入っても、相手からは余裕が感じられた。

キャプテンを勤めるファルコーニと握手をかわす。

笑っていた。

侮蔑したような笑いだ。

今にみてる、その顔を真っ青にしてやる。

相手は前線で一人張っているサルバトーレを残して全員がイタリア陣内に残り、ゆっくりとパスを回す。

しかしボランチのファルコーニにボールが渡った瞬間、イタリアの攻撃が加速した。

右サイドハーフのロッシにスルーパスが通り、一気にサイドを駆け上がる。

五月雨が抜かれ、フリーでセンタリングを上げられた。

絶体絶命のピンチだったが、竹ノ内さんがボールをキャッチし事無きを得た。

やはりイタリアのカウンターは驚異だ。

しかし、ここでディフェンスラインを下げると攻撃に厚みがなくなり、単調な攻めになる。

イタリアと日本の我慢比べだ。

ボールが篤也に渡ると、イタリアのボランチとサイドハーフがプレスをかける。

ボランチのディノ・ガットウーゾは攻撃的なファルコーニをフォローする守備的な選手で、ミランユースで共に過ごしたファルコーニと息がピッタリだ。

篤也が五月雨にスルーパスを通し、五月雨が中に切り込む。

しかし相手のセンターバックのファビオと右サイドバックのクラウディオに挟まれる。

五月雨は強引にシュートを放ったが、枠を大きく外した。

五月雨は今日もアクセル全開でサイドを走り回る。

ファルコーニがキープするボールを宝田が後ろから奪いに行くが、腕一本だけでキープしている。

オーバーラップして来たサイドバックのクラウディオにパスを出す。

ロッシとのワンツーで篤也を抜き、サイドチェンジのボールを出す。

左サイドハーフが華麗なトラップでボールを止め、マークを振り払いフリーになったサルバトーレにセントリングをあげる。

しかしサルバトーレがシュートするより先に優一さんがボールをク

リアする。

始まって5分でカウンターから決定機を2度作られた。

しかし、時間が経つにつれイタリアがボールをキープする時間が増えていく。

速攻と遅攻をファルコーニが使い分けながら日本を攻める。

マルコがプレーに関与していない間にゲームを作り上げるのはファルコーニだ。

ファルコーニのパスが左サイドハーフのロッシに渡る。

ロッシが前を向き、ドリブル突破をはかるが、五月雨がサイドに追いやる。

ロッシは一度サイドバックのクラウディオに下げる。

クラウディオは前を向き、この試合初めて背番号10、マルコ・バレージにボールが渡る。

それまで子猫のように大人しかったマルコがボールを持った瞬間、まるで豹のように恐ろしい選手へと変貌する。

左足だけで、全く前を向かないドリブルはディフェンダーを困惑させる。

そのままサイドに流れるかに見えたが、センタリングを上げさせないため脇を走っていた三原さんの歩幅に合わせたかのように股を抜

いた。

走り込んできた選手が竹ノ内さんと1対1になる。

しかしその選手の放ったシュートは枠の外に飛んで行った。

相手のミスに助けられた日本は、マルコという天才を意識せざるおえなくなった。

それが、マズかった。

日本のパスをディノがインターセプト、ファルコーニにパスした。

その瞬間、日本にはマルコにしか注意が向いていなかった。

ファルコーニが前線にロングボールを蹴る。

日本ディフェンダーはマルコに注意し、二人がマークについていた。

しかしボールはマルコの頭の上を通り過ぎた。

日本が一番危険な男を見誤っていた。

ボールはディフェンスラインの裏に走り込んだサルバトーレに渡ってしまった。

サルバトーレは竹ノ内さんとの1対1を難無く決め、イタイアに先制された。

日本が一番マークしなくてはいけなかったのはストライカーのサル

バトーレだった。

しかし、一度触っただけで観客の心を引き付けるマルコのプレーに惑わされ、サルバトーレをフリーにしてしまった。

日本はこのまま前半を守り切れ、0 - 1で折り返した。

堅守カテナチオを誇るイタリア相手に先制点を許したまま前半を終えてしまった。

日本がシュートまで行けたのは結局五月雨が一人で持ち込んだ場面だけで後はシュートを放つところまで行くことさえ出来なかったのに対し、イタリアはおそらく理想的な展開に持ち込めたと思っているのだろう。

ベンチの雰囲気は最悪だった。

重苦しい雰囲気を打破するためにも、本来ならキャプテンである俺がなんとかしなければならぬだろうが、何をすればいいのか、さっぱり分からなかった。

監督が口を開いた。

「イタリア相手に1 - 0ですか　善戦ですね」

この人はふざけているのかと思った。

失点が1点で済んだのはイタリアが手を抜いたからだろう。

本気ならもう1、2点とれたはずだ。

「満足している人はいますか？」

当然誰も返事をしない。

「OK、それでこそ君達を選んだのです。残り45分、君達は必ず得点を奪えます。大切なのは諦めないことです。足を止めないことです。前半の45分、あれは無駄ではありません。イタリアのカテナチオは確実に緩んでいます。後半の45分間も、走り回って下さい。イタリアを走らせて下さい。特にイタリアのボランチ、ディノを疲弊させることが重要です。イタリアのボランチの役割は攻撃はファルコーニ、守備はディノに分かれています。ファルコーニの分ディノは走り回っていますし、五月雨君のシュートでディノは必要以上にこちらの左サイドをケアしています。必ずスタミナが切れます。そうなればイタリアはセカンドボールを拾えなくなり、カテナチオは確実に崩壊します」

監督はそう言う俺の前に立つ。

「キャプテンらしく振る舞わなくて構いません。いつもの亀山君でいいんですよ。遠慮はいりません」

ハーフタイムが終わり、クラブスタッフが呼びに来る。

神戸との練習試合、J2開幕戦のアヴァランチ大阪戦でのあの感覚に近いものを感じた。

ハーフタイムになった時は気落ちしていた。

だ^が、今はまるで正反対の気持ちになっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1598g/>

Dream is Professional

2010年10月14日17時36分発行